

外面

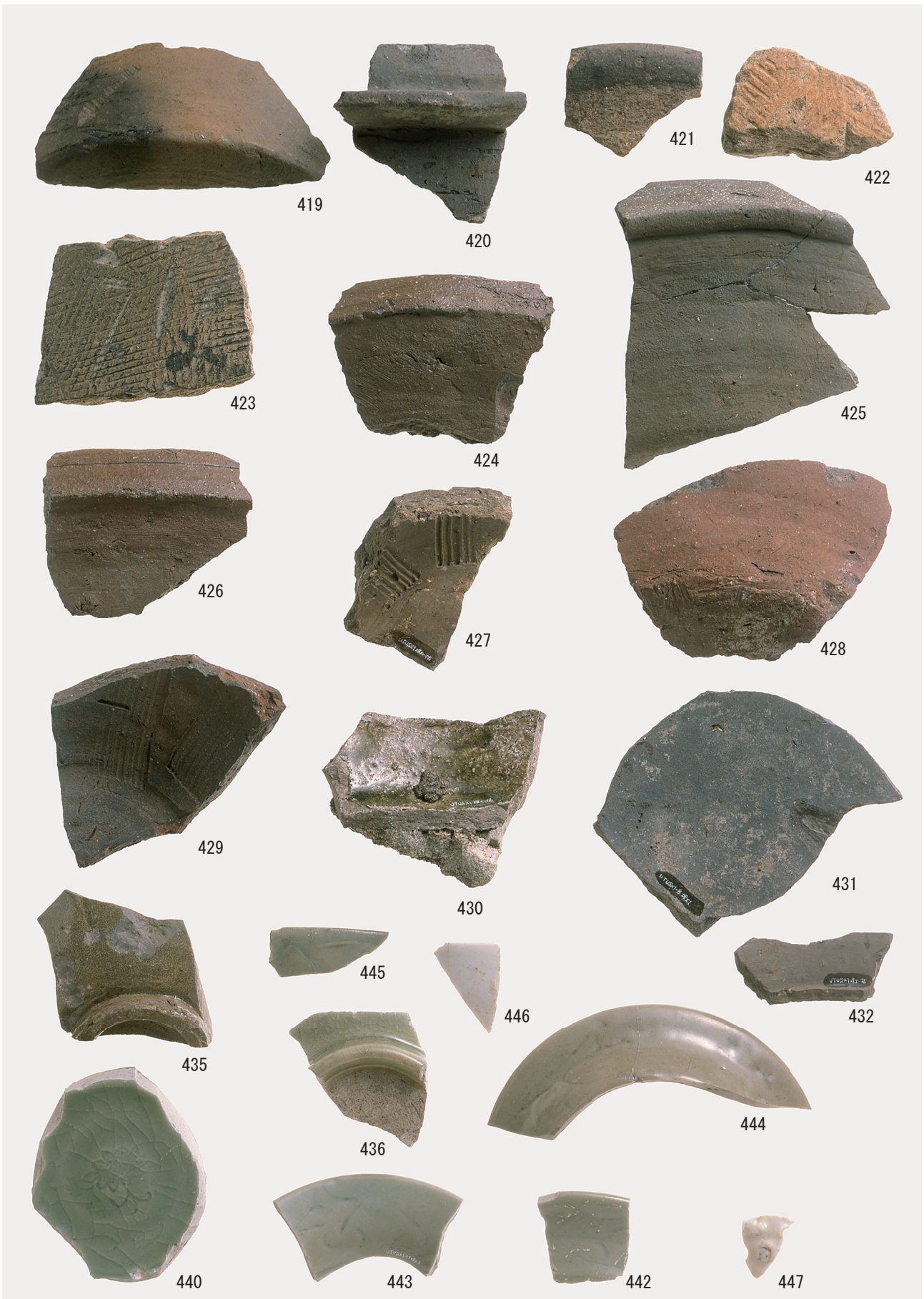


内面

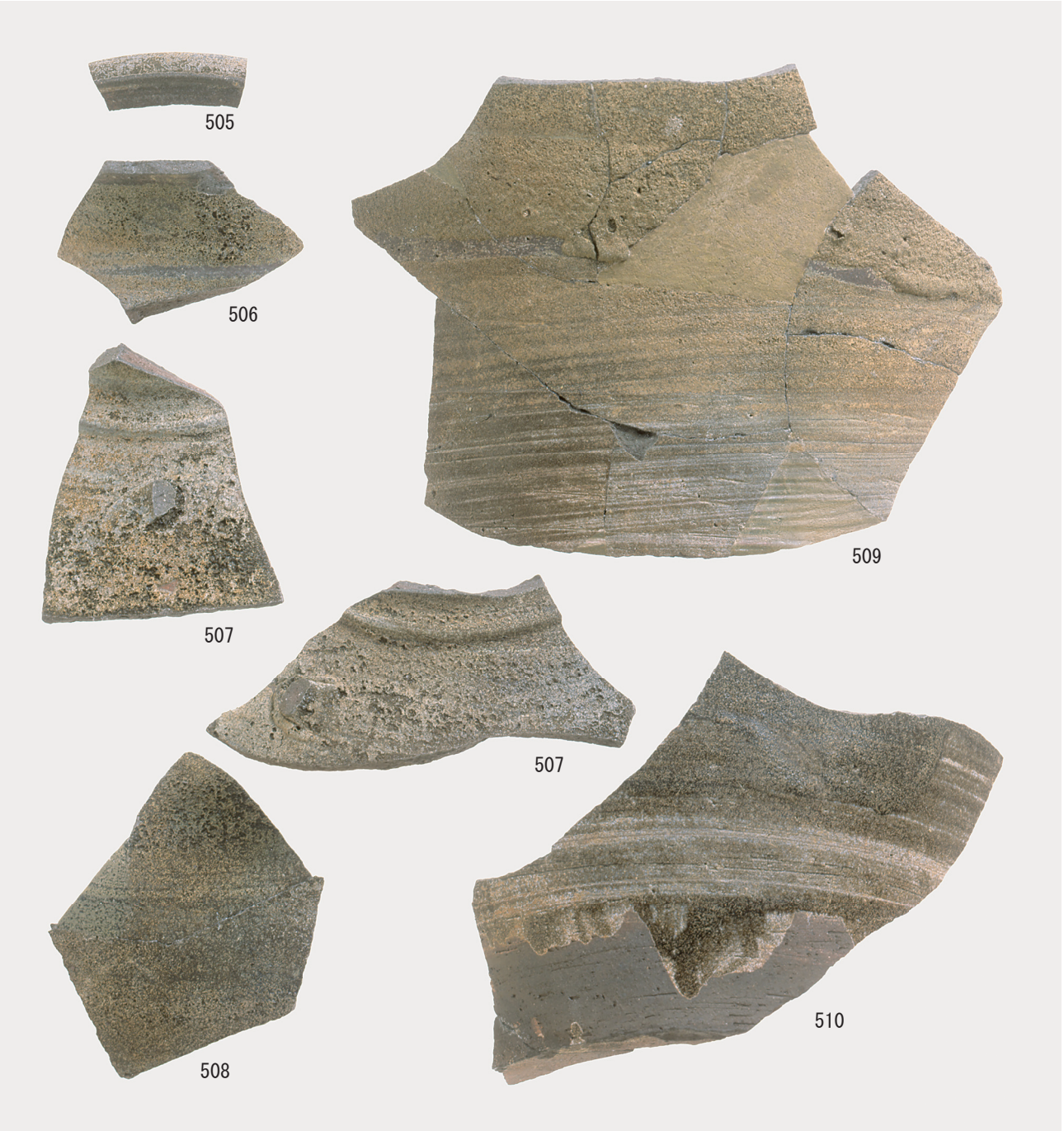


断面













448



449



450



451



452



453



454



455

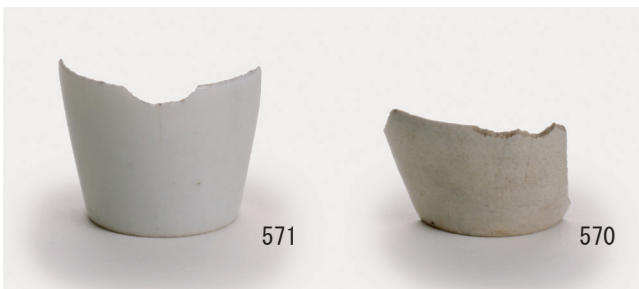


456









序 文

この報告書は、主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）改築事業に伴って、平成30年度に実施した志布志市志布志町に所在する宇都上遺跡の発掘調査の記録です。

宇都上遺跡は、志布志湾から北に約5kmの内陸部に位置し、安楽川の浸食を受けた台地と河川部の中間に所在します。

縄文時代においては早期前半を中心に、前平式土器などの土器や石器とともに集石遺構33基・土坑7基・落とし穴1基が発見されており、同時期の多数の集石遺構や連穴土坑が検出された、近接する高吉B遺跡との関連が想定されます。また、青磁・白磁等の陶磁器類や五輪塔などの石塔類が入った中世の土坑が検出され、古くから知られる港町としての「志布志」の歴史を考える上で、重要な資料を提供してくれました。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたり御協力をいただいた、県土木部道路建設課、志布志市教育委員会、関係各機関及び発掘調査・整理作業に従事された方々に厚くお礼を申し上げます。

令和2年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 前 迫 亮 一

報告書抄録

ふりがな	うとうえいせき							
書名	宇都上遺跡							
副書名	主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	204							
編集者名	藤島伸一郎・株式会社パスコ（池畑耕一・関口昌和・関口真由美）							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒 899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森 2 番 1 号 TEL 0995-48 - 5811							
発行年月	2020 年 3 月							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
宇都上遺跡	鹿児島県 志布志市 志布志町 安楽 宇都上・ 高吉	46221	292	31° 50′ 46″	131° 08′ 60″	2018.06.04～ 2018.11.28	4,998 m ²	主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）改築事業に伴う記録保存
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
宇都上遺跡	散布地	旧石器時代			加工痕のある剥片			
		縄文時代 早期	集石遺構 33 基 土坑 7 基 落とし穴 1 基		前平式土器，志風頭式土器， 加栗山式土器，小牧 3 A 式土器， 札ノ元Ⅶ類土器，石坂式土器， 別府原式土器，下剥峯式土器， 桑ノ丸式土器，押型文土器， 手向山式土器，塞ノ神 A a 式土器， 塞ノ神 A b 式土器，円盤形土製品， 磨製石鏃，打製石鏃，削器，磨製 石斧，磨石，石核，剥片			
		弥生時代 前期・中期			高橋式土器，入来式土器			
		古墳時代			辻堂原式土器			
		中世	大型土坑 2 基 土坑 2 基 溝状遺構 4 条 硬化面 1 条		土師器，土師質土器， 東播系須恵器，備前焼，常滑焼， 瀬戸焼，青磁，白磁，中国産陶器， タイ産陶器，染付，砥石，軽石製品， 石塔，石臼，鉄製品			
		近世	土坑 4 基 石塔 1 基・石碑 1 基 溝状遺構 2 条		薩摩焼，肥前系陶磁器，煙管， 石硯			
時代不明	杭列 2 列							
要約	<p>宇都上遺跡は縄文時代早期と中世を主体とする遺跡である。</p> <p>縄文時代早期は多種の土器とともに 33 基の集石などが検出されている。主となるのは前平式土器・加栗山式土器・小牧 3 A 式土器など前葉の土器で，谷を挟んだ両側平坦地に各型式の土器が集中して出土している。集石の集中域と重なり活動域の変動がわかる貴重な資料である。</p> <p>中世は陶磁器や石塔が入った 2 基の大型土坑が検出された。遺物は一括性がうかがわれ，石塔の廃棄理由など，その性格が目される。</p>							



第1図 遺跡位置図 (1:50,000)

例 言

- 1 本書は、主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）改築事業に伴う宇都上遺跡発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県志布志市志布志町安楽字宇都上・高吉に所在する。
- 3 発掘調査は、鹿児島県土木部道路建設課から鹿児島県教育委員会が依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」）が担当した。
- 4 発掘調査は、平成30年度に埋文センターが実施した。
- 5 整理作業・報告書作成作業は、令和元年度に埋文センターが実施した。
- 6 平成30年度は、発掘調査業務を新和技術コンサルタント株式会社へ委託し、埋文センターの指揮・監督のもとに調査を行った。また、空中写真撮影は株式会社ふじたに再委託した。
- 7 令和元年度は、整理作業及び報告書作成作業・自然科学分析・印刷製本を株式会社パスコへ委託し、埋文センターの指揮・監督のもとに実施した。
- 8 遺構図・遺物分布図の作成及びトレース、出土遺物の実測・拓本・トレースは株式会社パスコが行った。なお、報告書の作成にはAdobe社製「InDesignCC」、「IllustratorCC」、「PhotoshopCC」を使用した。
- 9 出土遺物の写真撮影は、埋文センターの写場にて、西園勝彦が行った。
- 11 金属製品の保存処理は、埋文センターが実施した。
- 12 本報告に係る自然科学分析は、放射性炭素年代測定をパリノサーヴェイ株式会社・株式会社パレオ・ラボへ委託した。
- 13 使用した土色は『新版 標準土色帳』（2013 農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づく。
- 14 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対高度である。
- 15 本書で使用した方位は、すべて座標北（G. N.）であり、測量座標は国土座標系第Ⅱ系を基準としている。
- 16 遺構種別ごとに略記号を付して調査を行った。遺構の略記号を次に示す。
SS：集石 SK：土坑 SD：溝状遺構
SA：杭列
- 17 執筆担当は以下のとおりである。
第1章、第2章第3節、第3章、第4章第2・5・6・7節 遺構、第6章 藤島伸一郎
第2章第1・2節、第4章第2～4節 土器
池畑耕一・関口真由美
第4章第1・2節 石器 関口昌和
第5章は委託業者の納品原稿をもとに藤島が編集した。
- 18 遺構の縮尺は次を基本とした。
集石 1/20, 土坑 1/20, 落とし穴 1/20
大型土坑 1/60, 溝状遺構・硬化面 1/100
杭列 1/40, 石塔・石碑 1/40
- 19 掲載遺物の縮尺は次を基本とした。
土器・土製品 1/3, 石器・石製品 1/1～1/3
石塔・石臼 1/8, 鉄製品 1/3, キセル 1/2
各図中にスケールを示してある。
- 20 掲載土器の拓本を表裏とも貼付の場合、表面が左、裏面が右に配置してある。
- 21 掲載遺物番号はすべて通し番号であり、本文、挿図、表及び図版の番号は一致する。
- 22 観察表中の胎土は次のとおりである。
白石・茶石・黄白石・灰石：その色を呈する小礫
黒石：黒色を呈する小礫もしくは黒色の鉱物
長石：主に白色の角張ったもの
雲母：主に金色を呈する薄い板状のもの
石英：透明度が高くガラス質の光沢をもつ
火山ガラスも一部含まれる
- 23 本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は埋文センターで保管し、展示・活用を図る予定である。なお、遺物注記等で用いた遺跡記号は「UTU」である。

本文目次

巻頭図版（カラー）

序文

報告書抄録

例言

目次

第1章	発掘調査の経過	1
第1節	調査に至るまでの経緯	1
第2節	試掘調査	1
第3節	本調査	1
第4節	調査の経過	2
第5節	整理作業・報告書作成作業	3
第2章	遺跡の位置と環境	4
第1節	地理・地質的環境	4
第2節	歴史的環境	4
第3節	都城志布志道路建設に伴う県内の遺跡	10
第3章	調査の方法と層序	13
第1節	調査の方法	13
第2節	層序	13
第4章	調査の成果	19
第1節	旧石器時代の調査	19
第2節	縄文時代早期の調査	20
第3節	弥生時代の調査	82
第4節	古墳時代の調査	82
第5節	中世の調査	83
第6節	近世の調査	101
第7節	時期不明の遺構	112
第5章	自然科学分析	113
第1節	出土試料の自然科学分析（年代測定）	113
第2節	放射性炭素年代測定	114
第3節	宇都上遺跡出土遺物の化学分析	116
第6章	総括	117
第1節	縄文時代早期	117
第2節	中世	118
第3節	近世	120

挿 図 目 次

第 1 図 遺跡位置図	第 30 図 集石 29 号・30 号	38
第 2 図 試掘調査トレンチ配置図及び調査区	第 31 図 集石 31 号と出土遺物	39
第 3 図 周辺の遺跡	第 32 図 集石 32 号と出土遺物	40
第 4 図 都城志布志道路建設に伴う 県内の遺跡	第 33 図 集石 33 号と出土遺物	41
第 5 図 グリッド配置及び調査範囲図	第 34 図 土坑 1 号～4 号	42
第 6 図 基本土層柱状図	第 35 図 土坑 5 号～7 号	43
第 7 図 土層断面図 (1)	第 36 図 落とし穴と出土遺物	44
第 8 図 土層断面図 (2)	第 37 図 縄文時代早期の土器分布図	45
第 9 図 土層断面図 (3)	第 38 図 縄文時代早期の土器 (1)	46
第 10 図 旧石器時代の試掘坑配置と 石器分布図	第 39 図 縄文時代早期の土器 (2)	47
第 11 図 旧石器時代の石器	第 40 図 縄文時代早期の土器 (3)	48
第 12 図 縄文時代早期の遺構配置図	第 41 図 縄文時代早期の土器 (4)	49
第 13 図 集石 1 号と出土遺物	第 42 図 縄文時代早期の土器 (5)	50
第 14 図 集石 2 号と出土遺物	第 43 図 縄文時代早期の土器 (6)	51
第 15 図 集石 3 号～5 号と出土遺物	第 44 図 縄文時代早期の土器 (7)	52
第 16 図 集石 6 号～8 号と出土遺物	第 45 図 縄文時代早期の土器 (8)	53
第 17 図 集石 9 号・10 号と出土遺物	第 46 図 縄文時代早期の土器 (9)	54
第 18 図 集石 11 号～13 号と出土遺物	第 47 図 縄文時代早期の土器 (10)	55
第 19 図 集石 14 号と出土遺物	第 48 図 縄文時代早期の土器 (11)	56
第 20 図 集石 15 号・16 号と出土遺物	第 49 図 縄文時代早期の土器 (12)	57
第 21 図 集石 17 号と出土遺物	第 50 図 縄文時代早期の土器 (13)	58
第 22 図 集石 18 号と出土遺物	第 51 図 縄文時代早期の土器 (14)	59
第 23 図 集石 19 号～21 号	第 52 図 縄文時代早期の土器 (15)	60
第 24 図 集石 22 号	第 53 図 縄文時代早期の土器 (16)	61
第 25 図 集石 23 号と出土遺物	第 54 図 縄文時代早期の土器 (17)	62
第 26 図 集石 24 号と出土遺物	第 55 図 縄文時代早期の土器 (18)	63
第 27 図 集石 25 号と出土遺物	第 56 図 縄文時代早期の土器 (19)	64
第 28 図 集石 26 号・27 号	第 57 図 縄文時代早期の土器 (20)	65
第 29 図 集石 28 号	第 58 図 縄文時代早期の土器 (21)	66
	第 59 図 縄文時代早期の土器 (22)	67
	第 60 図 縄文時代早期の石器分布図	68

第 61 図 縄文時代早期の石器 (1)	69	第 81 図 硬化面と出土遺物	97
第 62 図 縄文時代早期の石器 (2)	70	第 82 図 中世の出土遺物	97
第 63 図 縄文時代早期の石器 (3)	71	第 83 図 近世と時期不明の遺構配置図	101
第 64 図 縄文時代早期の石器 (4)	72	第 84 図 溝状遺構 5 号・6 号と出土遺物	102
第 65 図 弥生時代の土器	82	第 85 図 土坑 10 号～13 号と出土遺物	103
第 66 図 古墳時代の土器	82	第 86 図 石塔と土坑 11 号	104
第 67 図 中世の遺構配置図	83	第 87 図 石塔周辺の出土遺物 (1)	105
第 68 図 大型土坑 1 号	84	第 88 図 石塔周辺の出土遺物 (2)	106
第 69 図 大型土坑 2 号	85	第 89 図 石塔周辺の出土遺物 (3)	107
第 70 図 大型土坑 1 号の出土遺物 (1)	86	第 90 図 石塔周辺の出土遺物 (4)	108
第 71 図 大型土坑 1 号の出土遺物 (2)	87	第 91 図 石塔周辺の出土遺物 (5)	109
第 72 図 大型土坑 1 号の出土遺物 (3)	88	第 92 図 杭列 1 号・2 号	112
第 73 図 大型土坑 1 号の出土遺物 (4)	89	第 93 図 暦年較正結果	113
第 74 図 大型土坑 2 号の出土遺物	90	第 94 図 暦年較正結果	115
第 75 図 大型土坑 1 号・2 号の出土遺物 (1)	91	第 95 図 成分分析結果	116
第 76 図 大型土坑 1 号・2 号の出土遺物 (2)	92	第 96 図 縄文時代早期集石・遺物分布図	117
第 77 図 大型土坑 1 号・2 号の出土遺物 (3)	93	第 97 図 宮崎市山内石塔群の例	119
第 78 図 土坑 8 号・9 号	94	第 98 図 鶴喰遺跡 22 号土坑	120
第 79 図 溝状遺構 1 号・2 号	95		
第 80 図 溝状遺構 3 号・4 号と 溝状遺構の出土遺物	96		

表 目 次

第 1 表 周辺の遺跡一覧表	8	第 10 表 古墳時代土器観察表	81
第 2 表 都城志布志道路に係る 鹿児島県内の遺跡	10	第 11 表 中世遺構出土土師器・須恵器・ 陶器等観察表	98
第 3 表 旧石器時代石器観察表	19	第 12 表 中世遺構出土青磁・白磁等観察表	99
第 4 表 遺構番号振替表	44	第 13 表 中世遺構出土石製品観察表	100
第 5 表 縄文時代早期集石出土土器観察表	73	第 14 表 中世遺構出土金属製品観察表	100
第 6 表 縄文時代早期落とし穴出土石器観察表	73	第 15 表 中世土師器・須恵器・陶器観察表	100
第 7 表 縄文時代早期土器観察表	74	第 16 表 中世青磁・白磁観察表	100
第 8 表 縄文時代早期石器観察表	81	第 17 表 近世石塔周辺出土陶磁器観察表	110
第 9 表 弥生時代土器観察表	81	第 18 表 近世石塔周辺出土石製品観察表	111

第 19 表 近世石塔周辺出土金属製品観察表	111	第 23 表 FPM定量結果	116
第 20 表 放射性炭素年代測定結果	113	第 24 表 炭化物年代測定結果と 遺構内土器型式	118
第 21 表 測定試料および処理	115	第 25 表 周辺遺跡の遺構と土器型式	118
第 22 表 放射性炭素年代測定および 暦年校正の結果	116		

図 版 目 次

巻頭図版 1 遺跡遠景	図版 15 縄文時代早期の出土土器 (4)	
巻頭図版 2 縄文時代早期の出土遺物	図版 16 縄文時代早期の出土土器 (5)	
巻頭図版 3 中世の出土遺物	図版 17 縄文時代早期の出土土器 (6)	
本文中写真 1 I - 15 区 10 T 北壁土層断面	15	図版 18 縄文時代早期の出土土器 (7)
本文中写真 2 旧石器時代の石器	19	図版 19 縄文時代早期の出土土器 (8)
図版 1 遺跡遠景 旧石器時代・縄文時代早期の調査	図版 20 縄文時代早期の出土土器 (9)	
図版 2 縄文時代早期の集石	図版 21 縄文時代早期の出土土器 (10)	
図版 3 縄文時代早期の集石	図版 22 縄文時代早期の出土土器 (11)	
図版 4 縄文時代早期の集石	図版 23 縄文時代早期の出土石器	
図版 5 縄文時代早期の集石	図版 24 中世の出土遺物 (1)	
図版 6 縄文時代早期の土坑・落とし穴	図版 25 中世の出土遺物 (2)	
図版 7 中世の大型土坑 1 号	図版 26 中世の出土遺物 (3)	
図版 8 中世の大型土坑 2 号・土坑・硬化面	図版 27 中世の出土遺物 (4)	
図版 9 中世の溝状遺構	図版 28 中世の出土遺物 (5)	
図版 10 近世の土坑・溝状遺構・杭列	図版 29 中世の出土遺物 (6)	
図版 11 近世の石塔・土坑	図版 30 石塔周辺の出土遺物 (1)	
図版 12 縄文時代早期の出土土器 (1)	図版 31 石塔周辺の出土遺物 (2)	
図版 13 縄文時代早期の出土土器 (2)	図版 32 石塔周辺の出土遺物 (3)	
図版 14 縄文時代早期の出土土器 (3)		

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県土木部道路建設課（以下、道路建設課）は、主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）改築事業に先立って、事業対象地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下、県文化財課）に照会した。

この計画に伴い県文化財課は、平成18年度に志布志市内の埋蔵文化財分布調査を実施し、事業区域内に船迫遺跡・高吉B遺跡・宇都上遺跡・稲荷迫遺跡・後迫（下原）遺跡・見帰遺跡等が所在することが判明した。そこで道路建設課・県文化財課・埋文センターの3者で協議した結果、対象地域内の遺跡の範囲と性格を把握するために、当該地域において試掘調査を実施することとした。

第2節 試掘調査

1 調査の概要

宇都上遺跡の試掘調査は、県文化財課が埋文センターの協力を得て、平成23年度に3か所（第2図1～3T）、平成28年度に3か所（第2図4～6T）、平成29年度に9か所（第2図7～15T）、計15か所にトレンチを設定し実施した。その結果、弥生時代から縄文時代早期の遺物包含層を確認した。これらの試掘調査等の結果をふまえ、遺跡全体の表面積を6,500㎡、延面積を縄文時代早期6,500㎡、弥生時代2,000㎡、計8,500㎡と設定した。各年度の調査体制は、以下のとおりである。

2 調査体制

（1）平成23年度

調査日 平成23年7月20～21日

調査者 鹿児島県立埋蔵文化財センター

第一調査係長 東 和幸

文化財主事 上床 真

鹿児島県教育庁文化財課

文化財主事 川口 雅之

調査協力者 志布志市教育委員会生涯学習課

主 査 出口順一郎

主 査 相美伊久雄

（2）平成28年度

調査日 平成29年3月17日

調査者 鹿児島県教育庁文化財課

文化財主事 森 幸一郎

調査協力者 志布志市教育委員会生涯学習課

主 査 相美伊久雄

（3）平成29年度

調査日 平成29年10月19日

調査者 鹿児島県立埋蔵文化財センター

文化財主事 今村 結記

鹿児島県教育庁文化財課

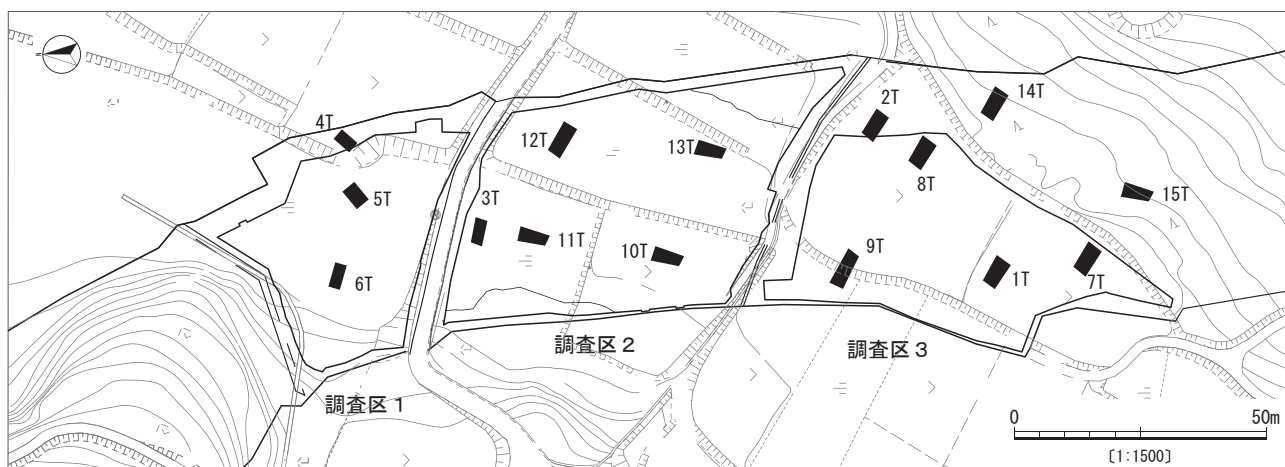
文化財主事 森 幸一郎

第3節 本調査

1 調査の概要

試掘調査の結果をふまえ、遺跡の取り扱いについて県道路建設課、県文化財課、埋文センターの3者で協議し、遺跡の現地保存が困難であることから、本調査を実施することとなった。本調査は「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査（民間委託）実施要綱」に基づき、新和技術コンサルタント株式会社へ発掘調査の業務委託を行い実施した。

調査期間は平成30年6月4日から平成30年11月28日までの6か月間で、調査体制は以下のとおりである。



第2図 試掘調査トレンチ配置図及び調査区

2 調査体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所 長 堂込 秀人
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター 次 長 兼 調 査 課 長 大久保浩二 総 務 課 長 高田 浩 第 一 調 査 係 長 中村 和美
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター 文 化 財 主 事 永濱 功治 (6～11月) 文 化 財 主 事 藤島伸一郎 (11月)
事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター 総 務 係 長 草水美穂子
現地指導	南九州縄文研究会会長 新東 晃一 鹿児島県考古学会会長 本田 道輝 鹿児島大学名誉教授 大木 公彦

3 発掘調査の民間委託

発掘調査の実施にあたり、埋文センターは「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査（民間委託）実施要綱」に基づき、新和技術コンサルタント株式会社へ見帰遺跡とともに発掘調査業務委託を行った。なお、埋文センターの文化財主事1名が監督職員として常駐し、調査方法及び業務内容に係わる統括・指揮・調整を行った。委託内容等は以下のとおりである。

委託先	新和技術コンサルタント株式会社
委託名	宇都上遺跡・見帰遺跡の発掘調査業務委託
委託期間	平成30年5月21日～平成31年3月20日 (見帰遺跡の調査期間(12～1月)を含む)
調査期間	平成30年6月4日～平成30年11月28日
委託内容	発掘調査業務 1式 測量業務 1式 土工業務 1式
担当者	主任技術者 井之上公裕 主任調査員 新福 深 調 査 員 賦句 博隆 調 査 員 新納 弘恵 技 術 者 鎌田 公平 技 術 者 上川路直光
検査	中間検査 平成30年10月22日 一部完成検査 平成30年12月7日 完成検査 平成31年3月8日 (完成検査は見帰遺跡含む)

第4節 調査の経過

1 発掘調査

発掘調査の経過については、調査区を1～3区（第5図参照）と分け、月ごとに集約し記載する。

6月

- ・発掘調査開始・オリエンテーション
- ・調査区1（D～H-3～7区）
石塔調査，IV層上面遺構検出・調査・測量
- ・調査区2（E～I-7～14区）
II・III層上面遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ

7月

- ・調査区1（D～I-3～8区）
表土重機掘削，IV層上面遺構検出・調査・測量，IV層重機掘削，V・VI層遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ，VII層上面遺構検出・調査・測量

8月

- ・調査区1（D～I-3～8区）
IV層上面遺構検出・調査・測量，IV層重機掘削，V・VI層遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ，VII層上面遺構検出・調査・測量，旧石器時代確認トレンチ平成30年度-1～4T設定，トレンチ内VIII～X層調査・遺物取り上げ
- ・調査区2（E～I-7～13区）
表土重機掘削，IV層上面遺構検出・調査・測量
- ・志布志市教育委員会相美伊久雄氏・志布志高等学校教職員遺跡見学

9月

- ・調査区1（D～I-3～8区）
IV層重機掘削，V・VI層遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ，VII層上面遺構検出・調査・測量
- ・調査区2（E～I-7～19区）
表土重機掘削，IV層上面遺構検出・調査・測量，IV層重機掘削，V・VI層遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ，VII層上面遺構検出・調査・測量，旧石器時代確認トレンチ（平成30年度-5・8・9T）設定，トレンチ内 VIII～X層調査
- ・調査区3（E～I-14～22区）
表土重機掘削，II・III層遺構検出・調査・測量，IV層上面遺構検出・調査・測量，IV層重機掘削，V・VI層遺構検出・調査・測量，VII層上面遺構検出・調査・測量，旧石器時代確認トレンチ（平成30年度-6・7・10・11T）設定，トレンチ内VIII～X層調査

10月

- ・調査区2（E～I-7～19区）
表土重機掘削，IV層上面遺構検出・調査・測量，IV層重機掘削，V・VI層遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ，VII層上面遺構検出・調査・測量
- ・中間検査

- 11月
- ・調査区2 (E～I-7～19区)
 - IV層上面遺構検出・調査・測量, IV層重機掘削, V・VI層遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ, VII層上面遺構検出・調査・測量
 - ・航空写真撮影
 - ・新東晃一南九州縄文研究会会長・本田道輝鹿児島県考古学会会長・大木公彦鹿児島大学名誉教授現地指導

2 整理作業

出土した遺物に関しては、現場内に整理作業所を設置し、6～11月に遺物の洗浄・注記・一部接合を行った。

第5節 整理作業・報告書作成作業

1 作成体制

本報告書に伴う整理作業・報告書作成作業は、令和元年度に「鹿児島県埋蔵文化財整理作業及び報告書作成作業(民間委託)実施要綱」に基づき、株式会社パスコへ、見帰遺跡とともに整理作業及び報告書作成作業業務の委託を行った。整理作業・報告書作成作業に関する調査体制は以下のとおりである。

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所 長 前迫 亮一
作成企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター 次 長 兼 総 務 課 長 野間口 誠 調 査 課 長 中村 和美 第 二 調 査 係 長 三垣 恵一
作成担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター 文 化 財 主 事 藤島伸一郎
事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター 主 幹 兼 総 務 係 長 草水美穂子
作成指導	南九州縄文研究会会長 新東 晃一

2 委託内容

整理作業及び報告書作成作業業務の委託内容については、以下のとおりである。

委託先	株式会社パスコ鹿児島支店
委託名	宇都上遺跡・見帰遺跡の整理作業・報告書作成作業業務委託
委託期間	令和元年5月13日～令和2年3月13日 (見帰遺跡の整理作業期間(11～2月)を含む)
作業期間	令和元年5月27日～令和元年11月22日
委託内容	整理作業業務 1式 報告書作成作業業務 1式

	自然科学分析業務	1式(宇都上遺跡のみ)
	印刷・製本業務	1式(宇都上遺跡のみ)
担当者	主任調査員 池畑 耕一 調 査 員 関口 昌和 調 査 員 関口真由美 調 査 員 鈴木 敏中	

3 整理作業の経過

経過については、月ごとに集約して記載する。

5月	・遺物分類・図面整理, フローテーション
6月	・縄文土器・中世陶磁器・近世陶磁器分類・接合, 弥生土器・古墳土師器・石塔・中世陶磁器実測・遺構図編集・トレース, 土層断面図作成・トレース, 年代測定委託, 原稿執筆
7月	・縄文土器・近世陶器接合・復元, 縄文土器・石塔・中世陶磁器・近世陶器実測・拓本, 遺構図編集・トレース, 原稿執筆, 台帳作成
8月	・縄文土器実測・拓本・トレース, 縄文土器・中世陶磁器接合・復元, 遺構図編集, 遺構・遺物レイアウト図作成, 原稿執筆, 台帳作成
9月	・縄文土器・土師器・中世陶磁器・近世陶磁器実測・拓本・トレース, 中世陶磁器復元, 縄文土器塗色, 遺物レイアウト図作成, 原稿執筆, 台帳作成 ・南九州縄文研究会会長新東晃一氏整理指導
10月	・土器・陶磁器等トレース, 遺構・遺物レイアウト図作成, 原稿執筆, 修正・観察表作成 ・中間検査(16日)
11月	・遺物写真撮影, 遺構・遺物レイアウト図作成, 観察表・台帳作成, 原稿執筆・修正, 遺物収納
12月	・報告書印刷・製本委託
2月	・報告書印刷, 納入
3月	・完成検査
報告書作成指導委員会	6月11日, 8月6日, 10月3日, 11月7日 調査課長ほか7名
報告書作成検討委員会	6月14日, 8月19日, 10月9日, 11月26日 所長ほか5名

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理・地質的環境

宇都上遺跡は志布志市志布志町安楽に所在する。志布志市は、鹿児島県の東側にある大隅半島の南東部に位置する。北は曾於市、東から北東は宮崎県都城市・串間市、南は曾於郡大崎町、西は曾於市・大崎町と接し、南側は志布志湾に面している。志布志市は志布志・有明・松山の3町が合併して成立し、志布志町は東北部に位置する。

大隅半島の地形は、南北方向に走る山地、その間の丘陵、台地及び低地などで構成される。東側の山地は、志布志湾北部から宮崎県に突出した形で北から南へと延びる鰐塚山地である。西側の山地は北部の霧島火山の分脈から南部の高隈山地へと連なっている。

地質は大部分が高隈山周辺に分布している新世代古第三紀の日層群を基盤とし、その上に鹿児島湾口にある阿多カルデラの火砕流、湾奥にある始良カルデラの入戸火砕流などが堆積し、丘陵や台地が広く分布するシラス地形となっている。さらにその上は鬼界カルデラ・開聞岳・池田・霧島山系・桜島などの火山噴出物でおおわれている。

火砕流堆積物は、大小の河川で開析されて谷を形成し、河川は合流し、西側は鹿児島湾へ、東側は志布志湾に注いでいる。西側へ注ぐ河川は山地が海に迫っているため距離が短い、東側へは長い川が多い。東側は北から安楽川・菱田川・持留川・肝属川などがある。下流には肝属平野などの平野が形成され、志布志湾岸には幅が1～1.5 kmの砂丘が約16 kmに延びている。

志布志町は東側を鰐塚山地が囲み、そこから北・西と台地が延び、南側は志布志湾に面している。台地を河川が分断しているが、小河川は次第に合流し、北から前川・安楽川・菱田川となって志布志湾に注いでいる。志布志港は現在、関西との間に旅客フェリーが就航し、同時に東南アジアなどとの物流交易拠点港だが、古くは都城や大隅半島中央部など内陸部からの物産交流港だった。

宇都上遺跡は志布志湾から直線距離約3.8 kmの安楽川左岸台地端部、標高約60 mの河岸段丘に立地している。安楽川は北東側から流れてくるが、遺跡近くで北側から流れている高下谷川・尾野見川と合流し、深い峡谷となる。ここから、大きくS字状に蛇行しながら6 km先の河口へ向かっている。遺跡のある大迫台地東端は急崖をなして低地へ落ち、低地と海の間は商店街になっている。現在の海岸線は埋め立てで沖へ延びているが、古くは台地が海岸線と接していた。台地は標高70～80 mの平坦地形だが、安楽川に接する方は河岸段丘となっている。

台地中央を主要地方道志布志福山線が横切っており、かつて台地南西下の低地から高下川に沿って国鉄志布志線が走っていたが、昭和62年に廃線となっている。

第2節 歴史的環境

大隅半島北部の曾於市・志布志市は『縄文銀座』と呼ばれるほど縄文時代の遺跡が多い。それに反し、弥生時代以降になると遺跡数は減少する。これは山地や台地が広く、低地が少ないという地形が影響しているものと思われる。安楽川流域沿いには、稲荷迫遺跡・高吉B遺跡・中原（曲瀬）遺跡など多くの遺跡があり、本遺跡同様、旧石器時代～中世の遺構・遺物が確認されている。近年、都城・志布志道路や東九州自動車道路建設に先立つ調査で多くの遺構・遺物が発見されている。

旧石器時代

堆積が厚いこともあって、遺跡数は少ない。宇都上遺跡ではナイフ形石器文化期層で加工痕のある剥片が出土している。ナイフ形石器文化期では稲荷迫遺跡で剥片尖頭器が、高吉B遺跡では三稜尖頭器が出土し、それぞれ礫群1基が検出されている。見帰遺跡ではナイフ形石器・磨石・敲石が出土している。

細石刃文化期の石器は稲荷迫・中原（曲瀬）・見帰・次五遺跡などで出土している。次五遺跡では細石刃核を含むブロックが検出されているが、それぞれで石材の違いがみられる。次五遺跡・中原（曲瀬）遺跡の細石刃核は畦原タイプである。見帰遺跡では細石刃・磨石・敲石・台石が出土している。曲瀬遺跡のやや北にある下原遺跡でも礫群や細石刃核などが発見されている。

縄文時代

前川・安楽川沿いには連綿として縄文時代の遺跡が多く存在している。草創期の遺跡として、曲瀬遺跡では有舌尖頭器が採集され、安楽小牧B遺跡では隆帯土器などが出土している。志布志町内ではほかにも隆帯土器期の舟形石組遺構や炭化ドングリの入った貯蔵穴が検出された東黒土田遺跡や、集石炉の検出された鎌石橋遺跡などがある。

早期の遺跡は多く、宇都上遺跡周辺でも安楽川流域に宇都上遺跡のほかに下原・下原B・稲荷上・稲荷迫・柳・高吉B・蓑輪・小迫上・弓場ケ尾・島廻・曲瀬・大渡B・百堂穴・見帰など多くの遺跡がある。下原・稲荷迫・高吉B・弓場ケ尾遺跡などでは前半の集落跡が検出されている。下原遺跡では前平式・加栗山式・吉田式・石坂式・下剥峯式・桑ノ丸式・押型文・苦浜式土器などとともに堅穴住居跡・集石遺構・土坑・埋設土器等が検出されている。ほかに磨製石鏃・打製石鏃・磨製石斧・打製石斧・磨石・敲石などの石器も出土している。稲荷迫遺跡では加栗山式・吉田式・石坂式土器などとともに集石遺構64基・連穴土坑3基・土坑2基などが検出されている。ほかに岩本式・倉園B式・手向山式・平椀式・塞ノ神A a式などの土器と、打製石鏃・削器・石槍・磨製

石斧などの石器も出土している。高吉B遺跡では岩本式・前平式・石坂式土器とともに集石遺構141基・連穴土坑4基・土坑8基・土器埋設遺構1基などが検出されているが、連穴土坑の中から石坂式土器が出土しており、連穴土坑の下限を示すうえで重要である。見帰遺跡では石坂式・下剥峯式・押型文土器や、打製石鏃・磨石・敲石などの石器が出土した。弓場ケ尾遺跡では加栗山式・吉田式・石坂式土器などとともに堅穴状遺構2軒・集石遺構4基・土坑6基が検出され、打製石斧・石皿・磨石も出土している。稲荷上遺跡では塞ノ神A a式・平椀式土器とともに集石遺構3基が検出されているが、耳栓状土製品・打製石斧も出土している。船迫遺跡では下剥峯式土器とともに打製石鏃・磨石・敲石などが出土している。炭床遺跡では塞ノ神A式土器とともに集石遺構3基が検出されている。

前期から中期にかけては遺跡数が少なくなる。前期では、百堂穴や鳥居下・別府（石踊）・船磯遺跡などで轟式・曾畑式土器が出土している。中期も、高吉B・中原（曲瀬）・船磯・志布志城跡・高濱遺跡で深溝式土器などが出土している程度である。見帰遺跡では落とし穴と思われる土坑5基と打製石鏃が発見されている。

後期では、中原（曲瀬）遺跡で中期末から後期前半の阿高系土器・岩崎下層式・南福寺式・指宿式土器などが多く出土し、磨消縄文土器や、疑似縄文土器なども含まれている。特に瀬戸内の福田KⅡ式土器の完形品や中津式・彦崎KⅠ式・津雲A式土器などの出土は文化の伝播・交流を考える上で貴重である。このほか松山式・市来式土器なども出土している。石器では打製石鏃や石槍・石匙などがみられないのに対し、石錘465点・土錘1点が出土しているのは、生業を考える上で興味深い。他に磨製石斧・打製石斧・敲石・磨石・石皿が出土している。円盤形土製品が1081点、円盤形石製品が18点出土しているのも用途が分からないが興味深い。勾玉・生殖器形・凹面形などの軽石製品も出土している。山角B遺跡では中岳Ⅱ式土器とともに集石遺構が検出され、西平式土器・打製石鏃も出土している。船迫遺跡では中岳Ⅱ式土器・打製石鏃・磨石・敲石・軽石製品などとともに落とし穴2基が検出されている。稲荷迫遺跡で土坑11基が検出され、市来式・丸尾式・北久根山式・中岳Ⅱ式土器などが出土している。宮脇遺跡では市来式土器、炭床遺跡では西平式土器・中岳式土器・打製石鏃、安良遺跡では中岳式土器が出土している。見帰遺跡では市来式・納曾式・辛川式・西平式・丸尾式・中岳Ⅱ式土器とともに磨石・敲石・石錘・円盤形土製品などが出土している。

晩期の遺跡も多いが、規模は小さい。稲荷上遺跡で上加世田式・入佐式・黒川式土器とともに土坑3基が発見されている。稲荷迫遺跡で上加世田式・入佐式・夜臼式土器などとともに打製石鏃・石槍・石匙・石錘・削器・

搔器・楔形石器・穿孔具・砥石・磨製石斧・打製石斧・礫器・石皿・磨石・敲石・凹石・石錘など多量の石器が出土し、孔列文土器も多い。山角B・炭床遺跡では黒川式・刻目突帯文土器・打製石斧が出土し、山角B遺跡では磨製石斧・勾玉も出土している。小迫・飛渡遺跡では黒川式土器とともに孔列文土器が出土し、安良遺跡では入佐式・黒川式土器とともに磨製石斧・打製石斧・磨石が出土している。

弥生時代

安良・高吉B・柳遺跡などでは中期の堅穴建物跡が、船迫遺跡では中期の掘立柱建物跡が検出されている。

稲荷迫遺跡では入来Ⅰ・Ⅱ式土器期の土坑墓が2基検出され、前期の高橋式、中期の吉ヶ崎式・山ノロ式土器などとともに、磨製石鏃・扁平片刃石斧などの石器や、前山Ⅱ式・須玖Ⅱ式土器など瀬戸内や北九州の影響を受けた土器も出土している。

高吉B遺跡では堅穴建物跡7軒、掘立柱建物跡5棟、土坑8基が検出されているが、堅穴建物跡群と、掘立柱建物跡群とは区域が分かれている。土坑の中には土器によって閉塞された横穴をもつものもある。土器の中には北九州・瀬戸内・東九州系のものも含まれている。土器のほかに丁子頭の土製勾玉・磨製石鏃・打製石鏃・磨石・敲石・石皿・砥石などの石器もある。

船迫遺跡では掘立柱建物跡4棟が検出され、山ノロ式土器、磨製石鏃・磨石・敲石などが出土している。稲荷上遺跡では入来式土器が、安良遺跡では山ノロⅡ式土器が出土している。柳遺跡では長方形の焼失住居跡が検出され、山ノロ式土器や土製勾玉・軽石製品が出土している。出土状況ははっきりしないが、大正年間に土橋遺跡では中広形銅矛が採集されている。

古墳時代

志布志湾の北端から南に突き出たダグリ岬には墳長約80mで葺石のある前方後円墳、飯盛山古墳がある。墳丘の高さは、後円部が11.5m、前方部が4.5mである。主体部は堅穴石室で、多くの円筒埴輪、壺形埴輪片が出土し、ガラス製勾玉・丸玉・小玉が採集されている。4世紀末から5世紀初頭に築かれている。

菱田川の河口近くにある小牧古墳群は、円墳4基で構成され、周辺から7世紀の須恵器が採集されている。六月坂横穴墓では横穴墓とともに7世紀代の土師器、須恵器などが出土し、安良遺跡では地下式横穴墓が検出されている。

この時期の集落遺跡は少ない。安良遺跡では7世紀頃の堅穴建物跡13軒と溝状遺構2条が検出され、住居内から須恵器や鉄鏃・刀子も出土し、多くの甕の底には木葉痕がある。稲荷迫遺跡では、中期中葉から後葉の堅穴建物跡4軒、土坑1基が検出され、勾玉・管玉も出土している。船迫・山角B・炭床遺跡では笹貫式土器が、宮

脇遺跡では辻堂原式・笹貫式土器と7世紀頃の須恵器が出土している。

古代

古代の志布志は日向国諸県郡に属していた。前川河口にある宝満寺跡は神亀年間(724～729)に創建された、西海の華と称されたほどの寺だったが、今は境内に五輪塔群が残っているだけである。山宮神社も和銅2年(709)に建てられたという。水迫横穴墓では須恵器の蔵骨器が出土している。

古代村落の様相ははっきりしていないが、安良遺跡では土師器・黒色土器・須恵器とともに墨書土器・焼塩土器も出土している。稲荷迫遺跡では土師器・焼塩土器・鞆の羽口などが、宮脇遺跡では木葉底の土師器甕や焼塩土器・須恵器が出土している。

中世

志布志は港町として栄え、『志布志津』と呼ばれた。

国指定史跡である志布志城跡は、前川の河口近くであり、内城・松尾城・高城・新城からなる。それぞれの城はシラス台地の端部に立地し、いくつかの深い壕で区画された郭からなり、それぞれの郭では、建物跡・溝状遺構・土坑・土塁・門跡などが検出され、土師器・青磁・白磁・青花・東播系捏鉢・瓦質土器・備前焼播鉢・天目碗・銭貨など主として14世紀半ばから15世紀の遺物が出土している。ベトナム・タイなど東南アジア産のものもあり、当時の広範な交易を物語っている。

山宮神社近くには12世紀後半に築城された志布志城の支城である安楽城跡がある。山宮神社境内では明治23年と25年に五輪塔が合わせて6基掘り出され、26年には蔵骨器の納められた石室が発見された。蔵骨器は青白磁の四耳壺で、副葬品として菊花紐の山吹あるいは草花飛雀鏡1面、鉄刀1口、土師器皿約10個、青白磁合子3個、同小壺2個、鉄塊1などがある。石室はすでないが、出土品の一部と出土状況の記録が山宮神社に保管されている。14世紀に創建された大慈寺の境内には開山玉山和尚の墓(1351年)がある。

集落跡としては、宇都上遺跡で常滑焼・備前焼などの国内産陶器、白磁・龍泉窯系青磁などの輸入陶磁器が出土している。安良遺跡では掘立柱建物跡・竪穴建物跡・土坑群などが検出され、土師器・瓦器塊・青磁・白磁・青白磁合子・東播系捏鉢・須恵質土器・瓦質土器・備前焼播鉢・常滑焼甕・黄釉鉄絵盤・石鍋・柱状高台皿・炭化米塊・炭化種子などが出土している。志布志海岸には今でも砂鉄が薄く堆積しているが、これを原料とした製鉄遺跡が前川・安楽川沿いに存在している。前川河口にある宝満寺跡内にある宝満製鉄遺跡では土坑・排滓場が検出され、土師器・炉壁・鞆の羽口・製錬滓・台石・敲石などが出土している。

近世

志布志城跡の東側に地頭仮屋が置かれ、その周辺に武家屋敷が建ち並んで『麓』を形成していた。志布志湊の周辺は『志布志千軒町』と呼ばれ、南は大隅半島南部から琉球、北は大坂などとの流通が盛んであった。藩米などの集積・積出港で、前川河口には津口番所が置かれ、藩政末期には密貿易も行われていた。この周辺では陶磁器などが出土している。

宝満寺跡では石積遺構や基礎石・柱穴などが検出されているが、時期がはっきりしない。苗代川焼・龍門司焼などの薩摩焼、伊万里焼、土師質土器、琉球通宝や加治木銭・慶長通宝などの古銭、石製品、鉄製品などが出土している。船迫遺跡では道跡と思われる帯状硬化面が検出され、陶磁器とともに二分金も出土している。安良遺跡では薩摩焼・肥前陶磁器などが出土している。

前川、安楽川などの中小河川沿いには近世・近代の東谷や荒田遺跡など多くの製鉄関連遺跡が確認されていることからこれらの河川を利用して砂鉄を運搬し、製鉄作業が行われていたことが考えられる。安良遺跡でも近代の磁器とともに鞆の羽口・鉄滓・坩堝が出土している。

(参考・引用文献)

志布志町教育委員会

- 1980『弓場ヶ尾地区一養輪遺跡・柳遺跡』
志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書
- 1985『志布志の埋蔵文化財』
- 1985『中原遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)
- 1988『飛渡遺跡・島廻遺跡・白木原遺跡』
志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(13)
- 2003『宮脇遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(28)
- 2003・2004『宝満寺跡・宝満製鉄遺跡・牟田遺跡・弓場ヶ尾遺跡』
志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(31)・(33)
- 2003『稲荷上遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(32)
- 2005『志布志城跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(34)
- 2005『弓場ヶ尾遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(35)

志布志市教育委員会

- 2013『安良遺跡』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(7)
 - 2013『(伝)六月坂横穴墓』
志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
 - 2013『山角B遺跡・炭床遺跡』
志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(11)
 - 2018『志布志城跡(内城跡)1～9次調査』
志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(12)
 - 2018『次五遺跡』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(13)
- ##### 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 2012『稲荷迫遺跡』
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(169)
 - 2014『船迫遺跡・高吉B遺跡』
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(180)
- ##### 鹿児島県教育委員会(公財)埋蔵文化財調査センター
- 2019『見掃遺跡』
(公財)埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(23)



第3図 周辺の遺跡 (1/25,000)

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地 (志布志市)	時代	地形	遺構・遺物等	備考
1	立山遺跡	有明町伊崎田字立山・野円・平・室太郎	古墳	台地		
2	下原B遺跡	志布志町内ノ倉字下原	旧石器, 縄文早・晩, 弥生中	丘陵	礫群, 細石刃核, 竪穴建物跡・土坑・集石・埋設土器, 前平式・加栗山式・吉田式・石坂式・下剥峯式・桑ノ丸式・押型文・苦浜式土器, 打製石鏃・磨製石鏃・打製石斧・磨製石斧・磨石・敲石	
3	稲荷上遺跡	志布志町安楽字稲荷上	縄文早・晩, 弥生中, 古墳	台地	集石・土坑, 平椀式・塞ノ神Aa式・上加世田式・入佐式・黒川式土器, 耳栓, 打製石斧, 入来式土器	志布志町埋文報 (32)
4	稲荷迫遺跡	志布志町安楽字稲荷迫・牧	旧石器, 縄文早・後・晩, 弥生, 古墳, 古代	台地	礫群・剥片尖頭器・細石刃・細石刃核, 竪穴建物跡・集石・連穴土坑・土坑・土坑墓, 岩本式・加栗山式・吉田式・石坂式・平椀式・市来式・中岳II式・上加世田式・孔列文土器, 石槍, 磨製石斧・穿孔孔具	鹿児島県埋文セ (169)
5	柳遺跡	志布志町安楽字柳	縄文早, 弥生中	台地	集石, 吉田式・石坂式・押型文・撚糸文土器, 磨石・敲石, 竪穴建物跡, 山ノ口式土器, 土製勾玉, 軽石製品	志布志町埋文報
6	菘輪遺跡	志布志町内ノ倉字菘輪	縄文早, 弥生中	台地	集石, 吉田式土器, 石鏃, 山ノ口式土器	志布志町埋文報
7	札建遺跡	志布志町内ノ倉字札建	縄文晩, 弥生中	台地	山ノ口式土器	志布志町埋文報
8	土橋遺跡	有明町野井倉字土橋・下原・土原・合所・下口・谷尻, 有明町伊崎田字堺・西ヶ迫	縄文後, 弥生中	台地	中広形銅矛	考雑 8-2
9	小迫下遺跡	志布志町安楽字小迫下・曲迫	縄文早・後・晩	台地		平成 16 年確認調査
10	宇都上遺跡	志布志町安楽字宇都上・高吉	旧石器, 縄文早, 弥生前・中・古墳, 中世, 近世	台地	前平式・志風頭式・加栗山式・小牧 3A 式・札ノ元Ⅶ類・石坂式・別府原式・下剥峯式・桑ノ丸式・押型文・手向山式・塞ノ神 A 式土器, 打製石鏃・磨製石鏃・削器・磨製石斧・磨石, 高橋式・入来式土器, 土師器・土師質土器・東播系須志器・備前焼・常滑焼・瀬戸焼・青磁・白磁・中国陶器・タイ産陶器・染付, 砥石・軽石製品・石塔・鉄製品, 薩摩焼・肥前系陶磁器・煙管	本報告書
11	高吉B遺跡	志布志町安楽字宇都上・茶馬場・雨堤	旧石器, 縄文早・中・後・晩, 弥生中, 中世～近世	台地	礫群, 三稜尖頭器, 集石・土坑・落とし穴, 前平式・石坂式・押型文・手向山式・苦浜式・深浦式・中岳II式, 打製石鏃・石匙, 竪穴建物跡・掘立柱建物跡・土坑・横穴をもつ土坑, 山ノ口式土器・土製勾玉, 樹皮布叩石	鹿児島県埋文セ (180)
12	弓場ヶ尾遺跡	志布志町帖字弓場ヶ尾	縄文早, 古墳	台地	竪穴状遺構・集石・土坑, 加栗山式・吉田式・石坂式土器, 磨石・石皿・打製石斧	志布志町埋文報 (35)
13	稲荷免遺跡	志布志町帖字稲荷免		台地		
14	島廻遺跡	志布志町帖字島廻	縄文早, 弥生中	台地	集石, 前平式・吉田式・石坂式・平椀式土器, 山ノ口式土器	志布志町埋文報 (13)
15	渡迫遺跡	志布志町安楽字渡迫	古代	台地		平成 11 年農政分布調査
16	西迫遺跡	志布志町安楽字西迫	縄文晩	台地		平成 15 年農政分布調査
17	中原 (曲瀬) 遺跡	志布志町安楽字中原	旧石器, 縄文早・中・後	台地	細石刃核, 阿高式・南福寺式・指宿式・磨消縄文・松山式・市来式土器, 石錘・磨製石斧・打製石斧, 円盤形土製品	志布志町埋文報 (9)
18	曲瀬遺跡	志布志町安楽字中原・西迫・中渡	縄文 草創・後, 弥生	台地	有舌尖頭器, 指宿式・市来式土器, 磨石, 弥生土器	
19	小瀬A遺跡	志布志町安楽字中原小瀬・西迫	縄文後	台地	市来式土器, 打製石斧・磨製石斧	
20	小瀬B遺跡	志布志町安楽字小瀬・中原	縄文後, 弥生	台地	指宿式・市来式土器・弥生土器, 打製石斧	
21	大渡遺跡	志布志町安楽字大渡	縄文, 弥生	台地		
22	大渡B遺跡	志布志町安楽字大渡	縄文早・後	丘陵	塞ノ神式・阿高式・出水式土器, 凹石・石斧・石錘	
23	船迫遺跡	志布志町安楽字船迫・大渡	縄文早・後, 弥生中, 江戸	台地	落とし穴, 下剥峯式・中岳II式土器, 石鏃・磨石・敲石, 掘立柱建物跡・石集積, 山ノ口式土器, 磨製石鏃, 道跡, 二分金・陶磁器	鹿児島県埋文セ (180)
24	湯田堀遺跡	志布志町帖字湯田堀	縄文, 古墳, 中世	台地		平成 14 年確認調査
25	桃ノ木遺跡	志布志町帖字桃ノ木・五里ヶ迫	弥生中	丘陵		
26	飛渡遺跡	志布志町帖字飛渡	縄文晩, 弥生中, 古墳後	台地	黒川式・孔列文土器, 石槍・石鏃・打製石斧・磨製石斧・横刃形石器・石錘・磨石, 入来II式土器	志布志町埋文報 (13)
27	大久保C遺跡	志布志町安楽字大久保	弥生	台地		平成 11 年農政分布調査
28	上原遺跡	志布志町安楽字上原	弥生	台地		平成 11 年農政分布調査
29	山角B遺跡	志布志町安楽字山角, 炭床	縄文後・晩, 古墳後	台地	集石, 西平式・中岳式・黒川式・突帯文土器, 石鏃・打製石斧・磨製石斧・勾玉, 笹貫式土器	志布志市埋文報 (11)
30	山角A遺跡	志布志町安楽字山角	縄文後	台地	西平式土器, 打製石斧・石皿・磨石・敲石	
31	炭床遺跡	志布志町安楽字炭床	縄文早・後・晩, 古墳後	台地	集石, 塞ノ神 A 式・西平式・中岳式・黒川式・突帯文土器, 石鏃・打製石斧, 笹貫式土器	志布志市埋文報 (11)
32	大久保A遺跡	志布志町安楽字大久保	縄文, 弥生	丘陵		
33	大久保B遺跡	志布志町安楽字大久保・七本松	弥生	台地		
34	上重遺跡	志布志町安楽字上重	縄文後	台地		
35	百堂穴遺跡	志布志町安楽字岩戸	縄文前, 弥生	洞穴	轟式土器, 獣骨, 磨製石鏃・磨製石斧	
36	見帰遺跡	志布志町志布志字見帰	旧石器, 縄文早・後	台地	ナイフ形石器・細石刃・ハンマストーン・落とし穴, 石坂式・下剥峯式・西平式土器, 石鏃・磨石・円盤形土製品	埋文調査センター報 (23)
37	道悦遺跡	志布志町帖字道悦	縄文後, 弥生	丘陵	弥生土器, 磨製石斧	

番号	遺跡名	所在地 (志布志市)	時代	地形	遺構・遺物等	備考
38	油田遺跡	志布志町帖字油田・西中尾	縄文, 弥生	台地		昭和62年確認調査
39	七本松B遺跡	志布志町安楽字七本松	弥生	台地		平成11年農政分布調査
40	七本松A遺跡	志布志町安楽字七本松	弥生	台地		平成11年農政分布調査
41	高牧遺跡	志布志町安楽字高牧	弥生	台地		平成5年確認調査
42	二重堀遺跡	志布志町安楽字二重堀・七本松	弥生	台地	弥生土器, 打製石斧	
43	安楽城跡	志布志町安楽字宮下	中世	台地	蔵骨墓	建久年間(1190～1198)築城
44	山宮神社	志布志町安楽字宮下	古代, 中世	台地	蔵骨器・和鏡・直刀・青白磁四耳壺・合子他	銅鏡(唐草鴛鴦文様鏡) 大正7年国指定
45	宮内遺跡	志布志町安楽字宮内・下原	弥生, 古代	台地		
46	宮ノ上遺跡	志布志町安楽字宮之上	古代	台地		平成12年東九州道分布調査
47	尖堀遺跡	志布志町安楽字尖堀	古墳, 古代, 中世	台地		
48	宮脇遺跡	志布志町安楽字宮脇・岩下	縄文後・晩, 古墳後, 古代	台地	竪穴状遺構, 指宿式・市来式・笹貫式土器, 土師器・須恵器	志布志町埋文報(28)
49	水神松遺跡	志布志町安楽字水神松・三郎丸・小井出手	古墳	平地	壺・磨製石斧	
50	安良遺跡	志布志町安楽字勢園	縄文後・晩, 弥生中, 古墳後, 古代～近代	台地	竪穴建物跡, 小牧3A式・納曾式・西平式・中岳式・黒川式土器, 打製石斧, 山ノ口式・須玖式土器, 溝, 笹貫式土器・須恵器, 土師器・焼塩土器・須恵器, 掘立柱建物跡・土坑, 土師器・青磁・白磁・備前焼・常滑焼, 石鏝, 炭化米塊	志布志町埋文報(7)
51	安楽小牧	志布志町安楽字小牧	縄文早	台地		
52	安楽小牧B	志布志町安楽字小牧	旧石器, 縄文草創・早, 弥生	台地	ナイフ形石器・細石刃・細石刃核, 集石, 隆帯文土器, 吉田式・妙見式・天道ヶ尾式・塞ノ神A式・塞ノ神B式・苔浜式土器, 耳栓, 打製石鏝・磨石・敲石・石皿・異形石器, 弥生土器, 石包丁	
53	小牧古墳群	志布志町安楽字小牧	古墳後	台地	円墳4基, 土師器・須恵器, 軽石加工品	
54	次五遺跡	有明町野井倉字次五・横堀	旧石器, 縄文早, 古代	台地	細石刃・畦原型細石刃核, 落とし穴・連穴土坑・土坑・集石・磨石・集積, 前平式・加栗山式・吉田式・札ノ元Ⅶ式・石坂式・中原Ⅴ式・下剥峯式・桑ノ丸式・押型文・手向山式・塞ノ神B式土器, 打製石鏝・磨製石鏝・石鏝・局部磨製石斧	志布志町埋文報(13)
55	大原遺跡	志布志町安楽字権現原	古代	台地	土師器・須恵器	消滅
56	権現原遺跡	志布志町安楽字権現原	弥生・古代	台地	弥生土器・土師器	
57	八ヶ代遺跡	志布志町安楽字八ヶ代	弥生, 古墳	台地		平成8年確認調査
58	鳥井下遺跡	志布志町安楽字鳥井下	縄文早・前	台地	縄文土器	
59	別府(石踊)遺跡	志布志町安楽字別府	縄文早・前・中・晩, 弥生中	台地	集石, 吉田式・石坂式・平栞式・塞ノ神式・轟式・曾畑式・岩崎式・黒川式土器, 土偶?, 石鏝・石斧・石匙・スクレイパー・磨石・敲石・石鏝・異形石器	志布志町埋文報(1)
60	別府上遺跡	志布志町安楽字別府上	古代	台地	土師器	
61	水ヶ迫横穴墓	志布志町志布志字水ヶ迫	古代	丘陵	土師器・須恵器壺	昭和8年発見
62	六月坂横穴墓	志布志町志布志字水ヶ迫	古墳	丘陵	土師器・須恵器・坏蓋・坏身	明治42年発見か
63	船磯遺跡	志布志町安楽字船磯・水ヶ迫	縄文前・中	海岸	縄文土器	
64	外堀遺跡	志布志町志布志字外堀	縄文早	台地		
65	大西遺跡	志布志町志布志字大西	古代	海岸	縄文土器	
66	愛甲喜春墓	志布志町志布志二丁目	近世	沖積平野		昭和36年県指定
67	大慈寺跡(即心院)	志布志町志布志二丁目	中世～近代	沖積平野	仁王像	興国元年(1340)開山 昭和46年県指定
68	大慈寺開山堂墓地	志布志町志布志二丁目	中世～近代	沖積平野		大慈寺止々庵跡 大慈寺開山堂
69	志布志城(新城)跡	志布志町帖字宇都ノ上	縄文早・中, 中世	台地	塞ノ神式土器, 石鏝, 壕・土塁・溝・柵列, 青磁・白磁・染付・陶器(中国・ベトナム・湿美・備前焼)	志布志町埋文報(14)・(34)
70	志布志城(高城)跡	志布志町帖字高城	中世	台地	壕・土塁, 青磁・白磁・染付・陶器(タイ・中国・常滑焼・備前焼)・金属製品・銭貨	志布志町埋文報(34)
71	志布志城(松尾城)跡	志布志町帖字松尾	中世	台地	青磁・白磁・染付・陶器(中国・瀬戸焼・楽焼・明三彩・天目茶碗・唐津焼), 碁石, 砥石, 銅製品・鉄製品	平成17年国指定 志布志町埋文報(34)
72	志布志城(内城)跡	志布志町帖字内城	縄文, 弥生, 中世	台地	石鏝, 壕・土塁・虎口, 土師器・青磁・白磁・染付・陶器(中国・タイ・瀬戸焼・備前焼・唐津焼), 瓦質土器・金属製品・古銭・鉄滓, 華南三彩	志布志町埋文報(34) 志布志町埋文報(1)・(8)・(12)
73	小淵遺跡	志布志町帖字小淵	縄文中・後	丘陵	岩崎下層式・岩崎上層式・指宿式・市来式・草野式土器, 石斧・叩石・石皿・石鏝	鹿考古(5)
74	高濱遺跡	志布志町帖字高濱	縄文中・後, 近世	河川		
75	宝満寺跡	志布志町帖字宝満	古代・中世・近世・近代	河岸段丘	土師器, 土坑・排滓場, 炉壁, 土師質土器・陶磁器・羽口, 製錬滓, 台石・敲石, 古銭	志布志町埋文報(31)・(33)
76	向川原遺跡	志布志町帖字向川原	縄文早	丘陵	縄文土器	

第3節 都城志布志道路建設に伴う県内の遺跡

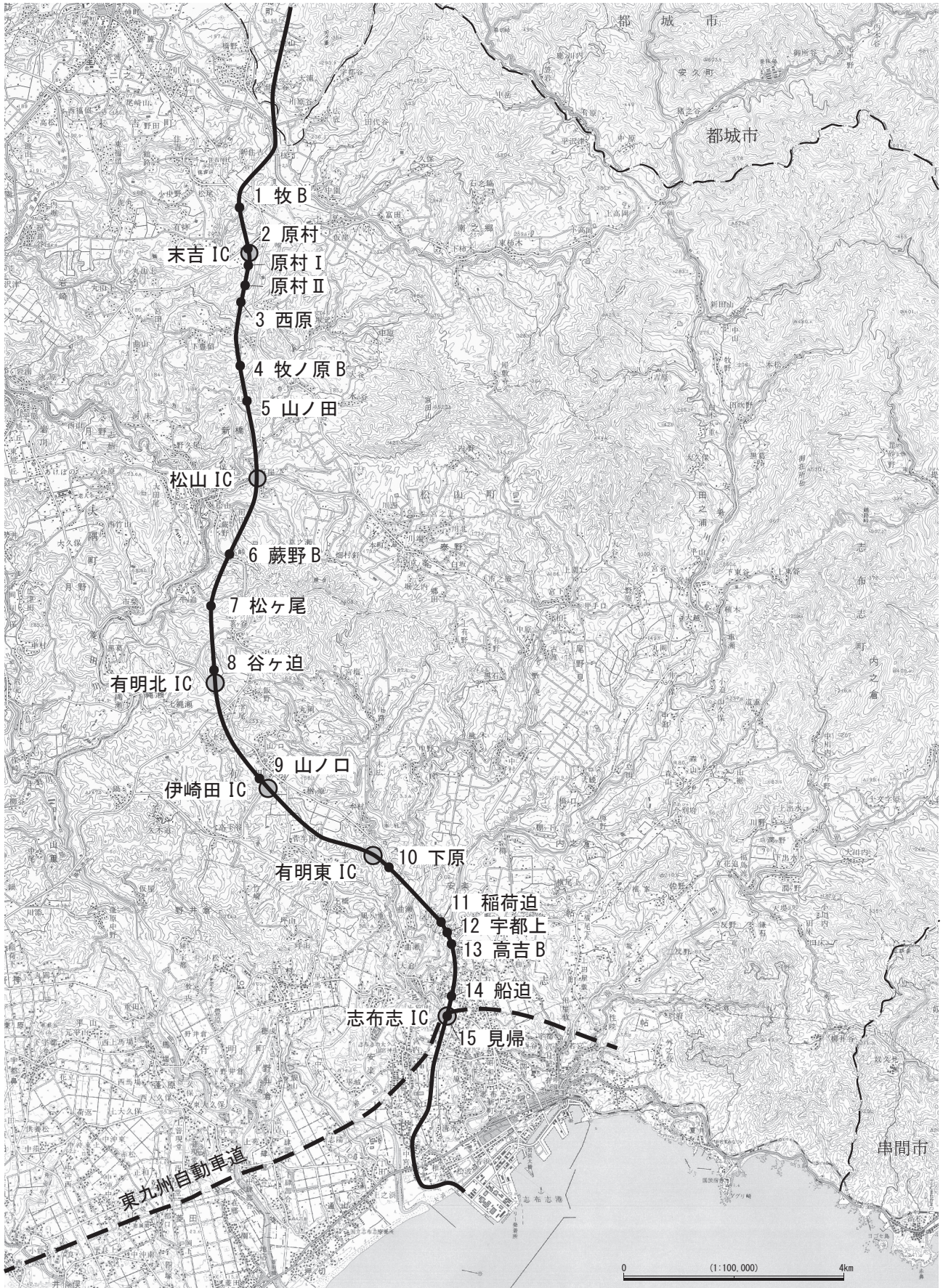
都城志布志道路は鹿児島県及び宮崎県に連なる道路である。その鹿児島県部分では、平成11年度から16年度にかけて末吉IC～有明北IC間、平成21年度から令和元年度にかけてその他区間、計15遺跡の発掘調査が行

われた。ここでは概要を下の表に示す。なお、今年度まで発掘調査や整理作業を行っている遺跡もあり、今後変更などが伴う可能性がある。詳細は各報告書を参考にされたい。

第2表 都城志布志道路に係る鹿児島県内の遺跡

番号	遺跡名	所在地	発掘調査	整理作業・報告書作成	遺跡の概要						
					時代・時期	主な遺構	主な遺物				
1	牧B	曾於市末吉町岩崎牧	令和元年度	令和2年度整理作業予定	縄文早期	土坑6基, 埋設土器1基	石坂式・下剥峯式・押型文土器・打製石鏃・磨石				
					縄文中～晩期	竪穴建物跡1基, ビット1基	御領式・中岳Ⅱ式・入佐式土器, 打製石鏃・打製石斧				
					弥生早・中期	-	刻目突帯文土器, 山ノ口式土器				
					古代	土坑1基, ビット1基	土師器・黒色土器A類				
縄文時代後期の土器を伴う竪穴建物跡を1基検出している。中央土坑には土器以外に拳大の軽石を多く含んでいる。現在調査中であり、今後遺構等増加する可能性がある。											
2	原村	曾於市末吉町雨之郷字原村	平成29年度 平成30年度	令和元年度 令和2年度 刊行予定	旧石器	-	角錐状石器・剥片				
					縄文早期	竪穴建物跡2軒, 集石41基, 土坑14基, 落とし穴2基, 連穴土坑2基	岩本式・前平式・加栗山式・吉田式・石坂式・押型文・下剥峯式・辻タイプ・平椀式・壺ノ神式・苦浜式土器, 打製石鏃・石槍・スクレイパー・局部磨製石斧・打製石斧・環状石斧・石皿・環状石製品・砥石・石核				
					縄文前・中期	落とし穴5基, 土坑2基	-				
					縄文後期	竪穴建物跡2軒, 土坑13基, 溝状遺構1条	擬似磨縄文土器・中岳Ⅱ式・御領式・上加世田式土器, 打製石斧・磨石・線刻鏢				
					縄文晩期	-	入佐式・黒川式・刻目突帯文・組織痕土器, 打製石鏃・打製石斧・磨製石製品				
					弥生前・中期	土坑2基	高橋Ⅱ式・入来Ⅰ・Ⅱ式・山ノ口Ⅰ式・瀬戸内系土器, 磨製石鏃・勾玉				
					古墳	土坑1基	成川式土器, 鉄鏃				
					古代	土坑1基, 製鉄関連遺構1基	須恵器, 土師器, 輪の羽口, 鉄滓, 軽石				
					中世	土坑2基, 溝状遺構1条	白磁, 青磁				
					近世	土坑2基, 溝状遺構12条	染付, 薩摩焼, 寛永通宝, キセル				
					縄文早期	集石1基	石坂式・壺ノ神式土器				
					縄文後～晩期	-	指宿式・夜臼式土器				
					弥生～古墳	土坑5基	弥生土器				
					縄文早期	-	前平式・平椀式土器				
縄文早期	集石2基	押型文・平椀式・壺ノ神式土器									
近世	土坑墓3基	人骨3体, 寛永通宝・永楽通宝									
現末吉IC付近に広がる遺跡である。調査区や調査年度により主に3区に分かれており、IC北部分のⅢ区では、縄文時代早期から晩期にわたる多くの土坑や竪穴建物跡等の遺構及び遺物が発見されている。古墳時代の異形鉄鏃の出土や古代の製鉄遺構の検出も注目される。											
3	西原	曾於市末吉町雨之郷字西原	平成13年度	平成19年度刊行 理七報告書(124)	旧石器	-	三稜尖頭器・ナイフ形石器				
					縄文早期	集石17基, 大型土坑1基	押型文・壺ノ神式土器, 異形石器				
					縄文後期	竪穴建物跡1基, 土坑17基	中岳式土器, 管玉				
					古代～中世	溝状遺構1条	土師器				
旧石器時代では、三稜尖頭器の製作跡と考えられるブロックが2か所検出されている。縄文時代後期では、1基の竪穴建物跡から中岳式土器や管玉が出土している。											
4	牧ノ原B	志布志市松山町新橋字牧ノ原	平成14年度	平成19年度刊行 理七報告書(124)	旧石器	-	ナイフ形石器				
					縄文前～中期	落とし穴1基	-				
					縄文後～晩期	-	中岳式土器				
					旧石器時代では、ナイフ形石器が1点出土している。縄文前～中期においては、御池バミスを埋土に含んだ落とし穴が検出されている。						
5	山ノ田	志布志市松山町新橋字山ノ田	平成15年度	平成18年度刊行 理七報告書(109)	縄文早期	集石6基, 土坑1基	吉田式・壺ノ神式土器, 石鏃・石匙・磨石・剥片石器等				
					縄文早期	集石5基	下剥峯式・平椀式・壺ノ神式土器, 石鏃				
					縄文早期の集石が多く検出された遺跡である。遺物は縄文早期後半のものが多く。						
6	蕨野B	志布志市松山町新橋字蕨野	平成15年度 平成16年度	平成18年度刊行 理七報告書(109)	旧石器	礫群5基, ブロック15基	ナイフ形石器・三稜尖頭器・台形石器・剥片石器等				
					縄文早期	集石38基, ブロック18基, 土坑2基	吉田式・石坂式・下剥峯式・壺ノ神式土器, 打製石鏃・磨石・石匙・砥石				
					縄文中・後期	集石1基	阿高式・指宿式土器				
					弥生中期	-	入来式土器				
旧松山町では本格的な旧石器時代の遺構・遺物が出土した遺跡である。縄文時代早期においても、計50基以上の集石やブロックが検出されている。											
7	松ヶ尾	志布志市有明町伊崎田字松ヶ尾	平成18年度刊行 理七報告書(109)	縄文早期	集石9基	前平式・石坂式・壺ノ神式土器, 打製石鏃・磨石					
				縄文晩期	土坑1基	黒川式土器, 打製石鏃・磨製石斧・打製石斧					
				古代	掘立柱建物跡1棟, 溝状遺構3条, 遺跡遺構1条	土師器, 須恵器, 焼塩土器					
				縄文時代早期の集石が多く検出されている。古代の掘立柱建物跡も1棟検出されている。							
8	谷ヶ迫	志布志市有明町伊崎田字谷ヶ迫	平成15年度	平成18年度刊行 理七報告書(109)	縄文後期	-	指宿式土器				
					縄文晩期	-	黒川式・夜臼式土器, 磨石				
					縄文時代後期から晩期にかけての土器が出土している。						
9	山ノ口	志布志市有明町伊崎田字山ノ口	平成25年度 平成26年度 平成27年度 平成28年度 平成29年度刊行 理七報告書(188)	旧石器	-	剥片					
				縄文早期	集石2基, ブロック2基	知覧式・下剥峯式・壺ノ神式・山形押型文土器, 石鏃・石匙・スクレイパー					
				縄文中期	-	春日式・大平式・阿高系土器					
				縄文後期	土坑4基, 帯状硬化面11条	指宿式・市来式・中岳Ⅱ式土器, 石鏃・石匙・磨製石斧・打製石斧・磨石					
				縄文晩期	-	精製浅鉢形土器					
				弥生中期	-	入来式土器					
				近世	帯状硬化面3条, 溝状遺構5条	陶磁器					
科学分析の結果より、縄文時代後期と考えられる帯状硬化面が11条検出されている。											

番号	遺跡名	所在地	発掘調査	整理作業 報告書作成	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
10	下原	志布志市 有明町 伊崎田 字下原	平成24年度 平成25年度 平成26年度 平成27年度 平成28年度 平成29年度 平成30年度 刊行 埋七報告書(198)	平成25年度 平成26年度 平成27年度 平成28年度 平成29年度 平成30年度 刊行 埋七報告書(198)	旧石器	礫群3基	細石刃・細石刃核・スクレイパー・剥片
					縄文早期	竪穴建物跡3軒、土坑9基、 集石17基、埋設土器遺構1基	前平式・吉田式・石坂式・下剥峯式・桑ノ丸式・押型文・苦浜式土器、 打製石鎌・打製石斧・磨石・敲石・石皿
					縄文前～晩期	-	曾畑式・凹線文・中岳Ⅱ式土器、 打製石鎌・打製石斧・磨石・敲石・石皿
	調査区1	平成27年度	縄文早期	縄文早期	集石17基、土器集中1か所	前平式・吉田式・倉園B式・押型文・下剥峯式・桑ノ丸式土器、 打製石鎌・磨製石鎌・打製石斧・磨製石斧・磨石・敲石	
				縄文後～晩期	竪穴建物跡2軒、埋設土器遺構2基、 集石・土坑1基、溝状遺構7条、 硬化面1面	中岳Ⅱ式・入佐式・黒川式土器、 打製石鎌・打製石斧・磨石・敲石・石刀	
				弥生早～中期	竪穴建物跡3軒	早期・前期土器、山ノ口式土器	
	調査区2	平成25年度 平成27年度	縄文早期	縄文早期	集石3基、ビット9基	吉田式・倉園B式・石坂式・下剥峯式・塞ノ神A式土器、 打製石鎌・磨石・敲石	
				縄文前～晩期	溝状遺構2条、土坑2基、土器集中 1か所、炭化物集中1か所	野久尾式・中岳Ⅱ式土器、 石鎌・打製石斧・磨石・敲石	
				弥生中～後期	竪穴建物跡2軒、高床式建物跡1軒、 ビット2基	中期末～後期土器	
	調査区3	平成25年度 平成27年度	縄文早期	縄文早期	集石3基、ビット9基	吉田式・倉園B式・石坂式・下剥峯式・塞ノ神A式土器、 打製石鎌・磨石・敲石	
縄文前～晩期				溝状遺構2条、土坑2基、土器集中 1か所、炭化物集中1か所	野久尾式・中岳Ⅱ式土器、 石鎌・打製石斧・磨石・敲石		
弥生中～後期				竪穴建物跡2軒、高床式建物跡1軒、 ビット2基	中期末～後期土器		
近代					帯状硬化面2条	-	
縄文時代早期の多くの型式にわたる土器とともに集石が37基検出されている。縄文時代後期から弥生時代にかけての竪穴建物跡や掘立柱建物跡もみられ、 長期にわたり生活の場所として使用されていたと考えられる。							
11	稲荷迫	志布志市 志布志町 安楽 字中島	平成21年度 平成22年度 平成23年度 刊行 埋七報告書(169)	平成22年度 平成23年度 刊行 埋七報告書(169)	旧石器	礫群1基	剥片尖頭器・細石刃・細石刃核
					縄文早期	集石64基、連穴土坑3基、 土坑2基	岩本式・前平式・吉田式・倉園B式・石坂式・手向山式・平椀式・ 塞ノ神式土器、打製石鎌・削器・石槍・二次加工剥片・石核・磨製 石斧・礫器
					縄文後～晩期	土坑11基	市来式・丸尾式・北久根山式・中岳Ⅱ式・上加世田式・入佐式・黒 川式土器、打製石鎌・石匙・削器・搔器・石錐・石槍・穿孔具・楔 形石器・二次加工剥片・石核・石錘・打製石斧・磨製石斧・礫器・ 磨石・敲石・砥石・石皿・台石
					弥生早～中期	土坑墓2基	刻目突帯文土器・夜臼式・板付Ⅰ・Ⅱ式・入来Ⅰ・Ⅱ式・吉ヶ崎式・ 前山Ⅱ式・山ノ口式・須玖Ⅱ式土器、磨製石鎌・素材剥片・扁平磨 製片刃石斧
					古墳	竪穴建物跡4軒、土坑1基	辻堂原式・笹貫式土器、勾玉・管玉
					古代	-	土師器、焼塩土器、輪の羽口
					時期不明	土坑15基	-
縄文時代早期においては、集石をはじめとする多くの遺構が検出している。縄文晩期から弥生時代にかけては北部九州系等の土器が出土しており、他地 域との交流が窺える。古墳時代は成川式土器を伴う建物跡が4軒検出されており、編年の指標となる。							
12	宇都上	志布志市 志布志町 安楽 字宇都上・ 高吉	平成30年度	令和元年度 刊行 埋七報告書(204)	旧石器	-	剥片
					縄文早期	集石33基、土坑7基、落とし穴1 基	前平式・加栗山式・小牧3A式・札ノ元Ⅶ類・別府原式・石坂式・ 下剥峯式・桑ノ丸式・楢田押型文・手向山式・塞ノ神式土器、 局部磨製石鎌・磨製石斧・削器・搔器・石核・剥片
					弥生、古墳	-	高橋式・入来式土器、成川式土器
					中世	大型土坑2基、土坑2基、溝状遺構 4条、硬化面1条	土師器、土師質土器、青磁、白磁、染付、中国製陶器、タイ製陶器、 常滑焼、瀬戸壺、備前焼、東播系須恵器、軽石製品、砥石、大型石 製品（五輪塔・板碑・石臼等）、鉄製品
					近世	石塔1基、溝状遺構2条、土坑4基	染付（肥前系）、薩摩焼（苗代川・龍門司系）、鉄製品、煙管、石硯
縄文時代早期前葉及び中世を主体とした遺跡である。縄文時代は谷部を挟み多数の集石が、中世においては大型の土坑から多くの陶磁器や石製品が出土 している。詳しくは本報告書を参照されたい。							
13	高吉B	志布志市 志布志町 安楽 字高吉	平成22年度 平成23年度	平成23年度 平成24年度 平成25年度 刊行 埋七報告書(180)	旧石器	礫群1基	三稜尖頭器・剥片
					縄文早期	集石141基、土坑8基、土器埋設遺 構1基、連穴土坑4基	前平式・石坂式・押型文・手向山式・平椀式・塞ノ神式・苦浜式土器、 打製石鎌・局部磨製石鎌・削器・搔器・異形石器・打製石斧・ 石匙・磨石・石皿
					縄文前～晩期	落とし穴状遺構6基、土坑4基	深浦式土器
					弥生中期	竪穴建物跡7軒、掘立柱建物跡5棟、 土坑7基、横穴をもつ土坑1基、 石集積1基	山ノ口式・中溝式・須玖式・凹線文土器、土製勾玉・磨製石鎌・砥石・ 凹石・台石・樹皮布敲石
中世～近世	溝状遺構1条、古道7条、土坑墓2 基、石集積1基	土師器、陶磁器					
縄文時代早期では、141基の集石や4基の連穴土坑などの遺構や多様な型式の土器が出土している。連穴土坑のブリッジ部から完形に近い石坂式土器が 出土しており、注目される。弥生時代中期では、竪穴建物跡7軒や掘立柱建物跡5棟などの遺構が検出されている。特に横穴を土器片で塞いだ土坑は他に 例がない。							
14	船迫	志布志市 志布志町 安楽 字船迫	平成22年度	平成23年度 平成24年度 平成25年度 刊行 埋七報告書(180)	縄文早期	-	下剥峯式土器、石鎌
					縄文後期	落とし穴状遺構2基	中岳Ⅱ式土器、石鎌・磨石・敲石
					弥生中期	掘立柱建物跡4棟、集石1基	山ノ口式土器、磨製石鎌・磨石・敲石
					近世	帯状硬化面	二分金、銭貨、陶磁器
弥生時代中期を主体とした遺跡で、掘立柱建物跡4棟等の遺構や山ノ口式土器が出土している。近世においては、道跡と思われる硬化面から、二分金が 出土している。							
15	見帰	志布志市 志布志町 志布志 字見帰	平成25年度 平成30年度	令和元年度 令和2年度 報告書刊行予定	旧石器	-	打面調整剥片・敲石・磨石
					縄文早期	土坑10基、集石1基	石坂式・下剥峯式土器、石鎌・磨石・石皿
					縄文中期	土坑1基、落とし穴3基	石鎌
					縄文後期	-	西平式・丸尾式・中岳Ⅱ式土器、石鎌・石匙・打製石斧・磨石・敲石
時期不明	土坑2基、溝状遺構2条	-					
縄文時代中期では、落とし穴3基が検出されており、東九州道部分の調査でも同様の遺構が出土しており、狩猟場としての利用が考えられる。							



第4図 都城志布志道路建設に伴う県内の遺跡

第3章 調査の方法と層序

第1節 調査の方法

本節では、発掘調査の方法、遺構の認定と検出方法、整理作業・報告書作成作業の方法について記す。

1 発掘調査の方法

宇都上遺跡の発掘調査は、平成23・28・29年度に試掘調査、平成30年度に本調査を実施した。なお工期の関係で確認調査は実施していない。本調査は、表面積4,998㎡、延面積7,483㎡を対象に実施した。

本遺跡の調査区割り（グリッド）は、世界測地系座標におけるX=-165700.000, Y=8050をA-1区北西点（0・0）とし、区割りは10mおきにグリッドを設定し、北から南に向かって1・2・3・・・, 西から東に向かってA・B・C・・・, と設定した。また調査の工程上、道路区画や地形で遺跡を大きく3分割し（第5図）、北から調査区1～3と分け、1から順に調査を行った。排土の移動や引き渡し等に考慮し、調査区1の調査時は2・3を排土場とするなど、排土の扱いに考慮しつつ進めた。

発掘調査において用地境界は安全上の措置として約1～2m程度内側に控えて調査範囲を設定し、調査深度が2mを超える場合は更に2m程度の段（控え）を設けて下層を掘削した。

表土及び無遺物層は重機で慎重に掘削し、その後、人力による掘り下げ作業を実施した。また、旧石器時代包含層の広がりを確認するため、11か所においてトレンチ調査（位置は第10図参照）を実施した。包含層中の遺物の多くは縄文時代早期の土器であり、トータルステーションで座標位置を測量後、取り上げた。遺構内遺物は図面上に記載し、遺構番号及び遺構内遺物番号を付けて取り上げた。遺構の検出時や埋土半掘・完掘時などには写真撮影を行った。また調査終盤の11月には、調査区内の縄文時代早期における集石遺構を中心に空中写真撮影を行った。

2 遺構の認定と検出方法

調査開始時において、調査区内は西側へゆるやかに傾斜する平坦な畑となっており、現代における耕地整理の影響を強く受けている。そのため、旧地形が高い場所では上部が削平されている遺構もみられた。それらの遺構は検出できた層から記録し、内部に入っていた遺物で時期判定を行った。

遺構の認定については、検出面の層位、埋土の色調、埋土半掘による確認を行い、調査担当者間で検討の上で認定した。主な遺構の認定は以下のとおりである。

縄文時代早期の集石遺構については、V層からVII層上面において、礫の集中箇所とその規模等も考慮し認定した。また掘り込みについては、埋土の色調や礫の深さを考慮し決定した。土坑及び落とし穴については、VII層上

面を精査した後、土色の異なる箇所を半掘し、形状や深さを確認して認定を行った。溝状遺構については、検出面及び埋土、底面の形状を考慮し認定した。

なお、遺構は検出状況の写真撮影後、掘り下げ、実測等を行った。実測は、遺構の大きさに応じて縮尺10分の1もしくは20分の1で実施した。土坑や溝状遺構等は、埋土断面や完掘状況の写真も撮影した。

集石内には炭化物が含まれたものがあり、埋土ごと取り上げ、科学分析を行った。土坑内埋土は、土坑墓の可能性のあるものは埋土を採取し、ふるいかけを行った。

3 整理作業・報告書作成作業の方法

注記は、注記記号「UTU」を頭に、包含層資料は続けて「区」「層」「遺物番号もしくは一括」の順に記入した。遺構内資料は注記記号及び「区」の後に遺構記号を用いて遺構番号を記し、その後に「遺物番号もしくは一括」を記入した。遺物の選別は、層や遺構ごとに、時代や型式別で分類し、数や分布状況の把握に努めた。接合はすべて行い、時代や型式ごとに掲載遺物を決定し、実測・トレースを行った。集石遺構や土坑内で取り上げた埋土はフローテーションを実施し、採取できた炭化物はAMS年代測定を行い、年代推定の参考とした。

第2節 層序

層位は平成28年度の試掘調査で確認した層位を元に作成した（第6図）。本遺跡で確認された遺物包含層は、近世～中世（I～II層）と縄文時代早期（Va～VI層）である。また、時期決定の目安となる主な火山灰層の特色は以下のとおりである。

III b層では、黒色土中に黄褐色の御池火山灰層のパミスが認められた。基本的に御池火山灰のパミスは少量であるが、場所によっては数cmの堆積がみられた。IV a層の池田降下軽石は、黒色土中に軽石が点在する程度の量である。その直下には、IV b及びIV c層のアカホヤ火山灰があり、30cm程度の層を形成する。層の下位には1cm程度の豆粒状の軽石層が認められる。VII層は薩摩火山灰層で、15cm程度の層厚であるが、谷部分では色調が薄くなり、明確に層が認められない部分もある。そこでは薩摩火山灰層上位の縄文時代早期該当の黒色土と下位の縄文時代草創期・旧石器時代該当の黒色土との境界が明瞭ではない。旧石器時代該当層には赤橙色のパミスが点在する部分がある。

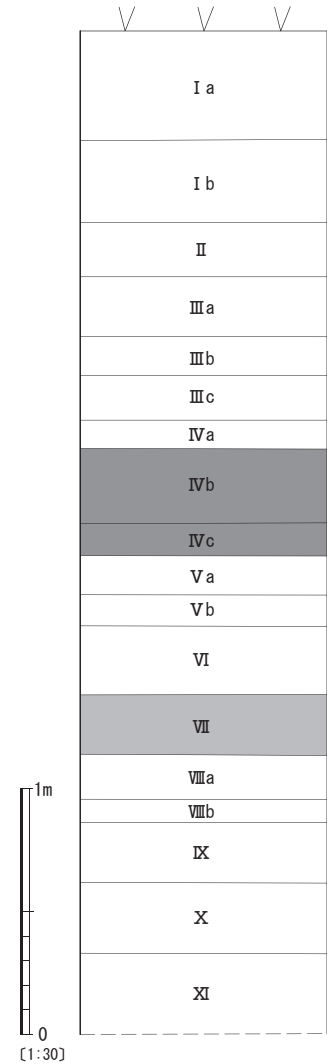
なお、H・I-9・10区を中心とした谷最深部のVII層以下は、流水等の影響を受けやすく、各層土が混在し分類できないため、T I～T III層の層位を別に設定した。T Iは黒色粘質土で、黄褐色パミスを多く含む層である。T IIは暗褐色粘質土で、黄褐色パミスはT Iに比べ少ない。T IIIは黒色粘質土で、極微細な石英を少量含む。



第5図 グリッド配置及び調査範囲図

基本層序

- I a層：黒褐色土 (10YR3/1) 表土
- I b層：黒褐色土 (10YR3/1) 旧表土
- II層：黒色土 (10YR2/2) 黄橙色パミスを含む。
しまり弱く、粘性強い。層厚20cm程。
- IIIa層：黒色土 (10YR2/1) しまり有り、粘性有り。層厚25cm程。
- IIIb層：黒褐色火山灰 (10YR3/2) 御池火山灰を含む。
しまり有り、粘性有り。層厚15cm程。
- IIIc層：黒色土 (10YR2/1) しまり有り、粘性強い。層厚20cm程。
- IVa層：黒褐色土 (10YR3/2) 池田降下軽石を含む。
しまり弱く、粘性強い。層厚10cm程。
- IVb層：明黄褐色土 (10YR6/8) アカホヤ火山灰層。
しまり強く、粘性有り。層厚30cm程。
- IVc層：黄褐色土 (10YR5/8) アカホヤ一次堆積層。
豆粒状軽石含む。しまり弱く、粘性弱い。層厚15cm程。
- Va層：黒色土 (10YR2/1) 白色パミスを含む。しまり弱く、粘性有り。
層厚15cm程。縄文時代早期の遺物包含層。
- Vb層：黒褐色土 (10YR2/3) しまり有り、粘性有り。層厚15cm程。
縄文時代早期の遺物包含層。
- VI層：黒褐色土 (10YR2/3) 黄橙色パミスを含む。
しまり有り、粘性有り。層厚30cm程。縄文時代早期の遺物包含層。
- VII層：明黄褐色土 (10YR6/8) 薩摩火山灰層。P14を含む。
しまり強く、粘性弱い。層厚25cm程。一部みられない部分あり。
- VIIIa層：黒褐色粘質土 (7.5YR2/2) 所謂チョコ層。
しまり弱く、粘性強い。層厚20cm程。
- VIIIb層：黒褐色土 (7.5YR3/2) しまり弱く、粘性有り。層厚10cm程。
- IX層：褐色土 (7.5YR4/3) しまり弱く、粘性弱い。層厚25cm程。
旧石器時代の遺物包含層。
- X層：暗褐色土 (7.5YR3/4) 二次シラス。
しまり強く、粘性弱い。層厚30cm程。
- XI層：橙色土 (7.5YR6/6) 黄橙色軽石を含む。
しまり弱く、粘性弱い。層厚30cm以上。



第6図 基本土層柱状図

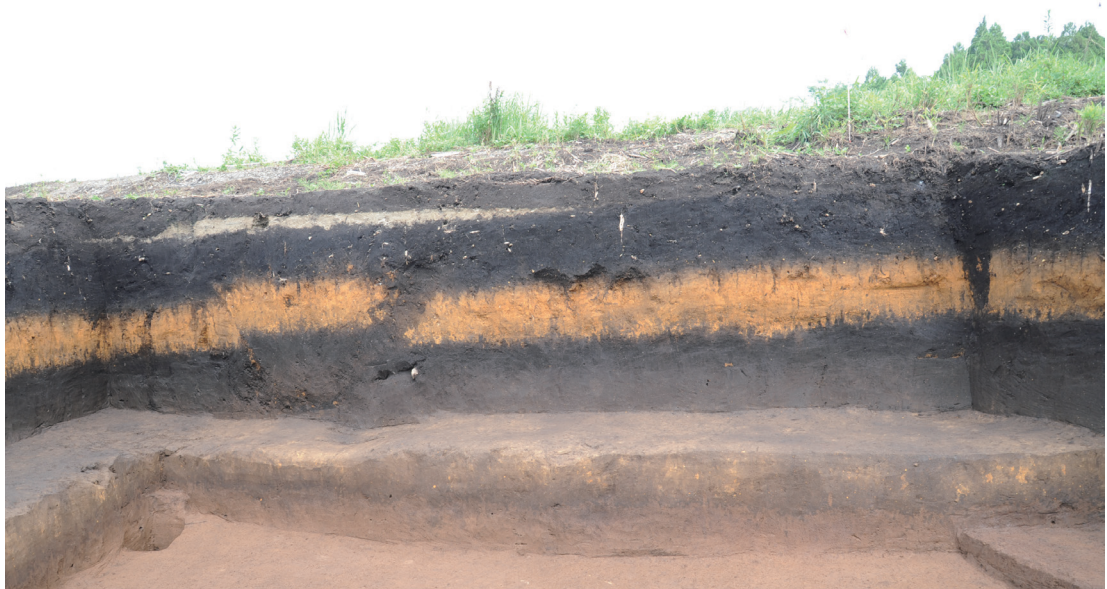
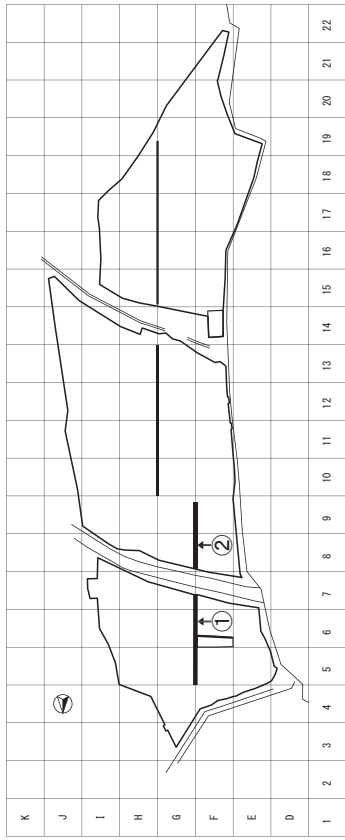
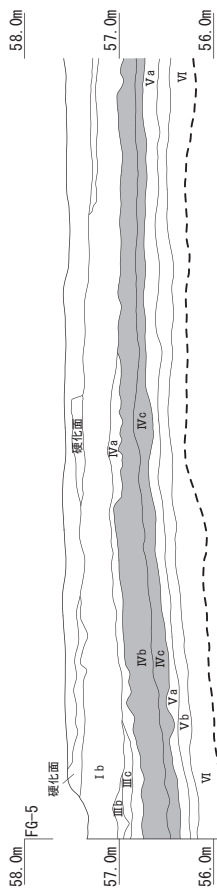


写真1 I-15区10T北壁土層断面

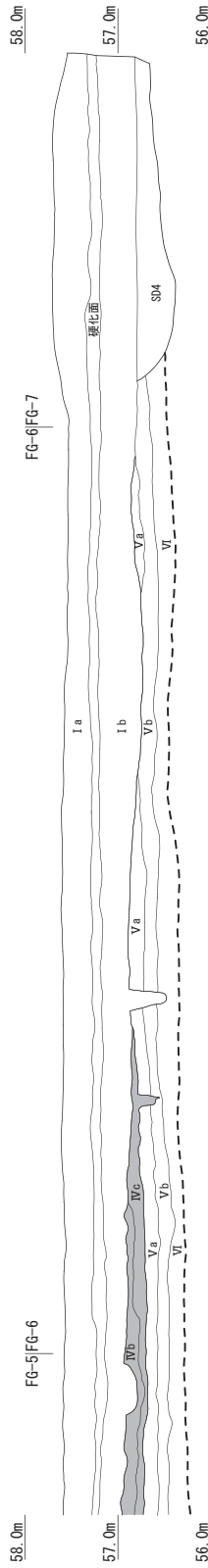


土層位置図

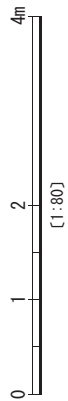
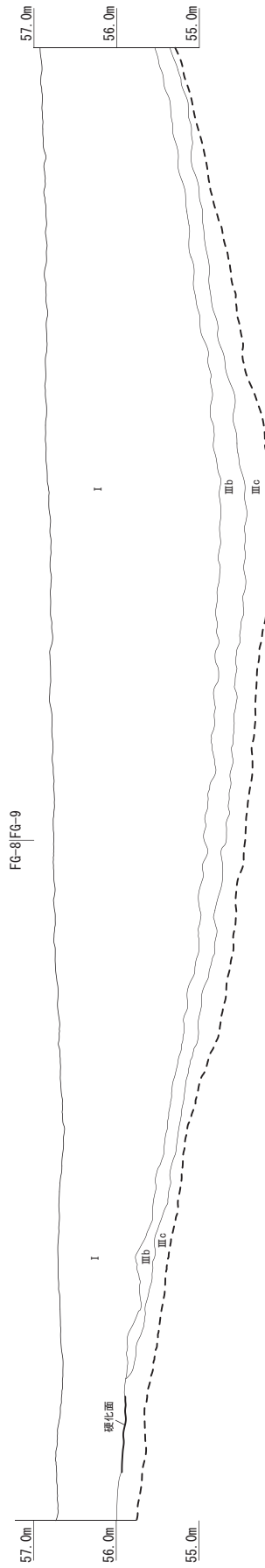
土層①



土層②

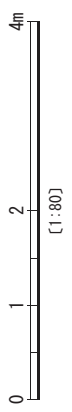
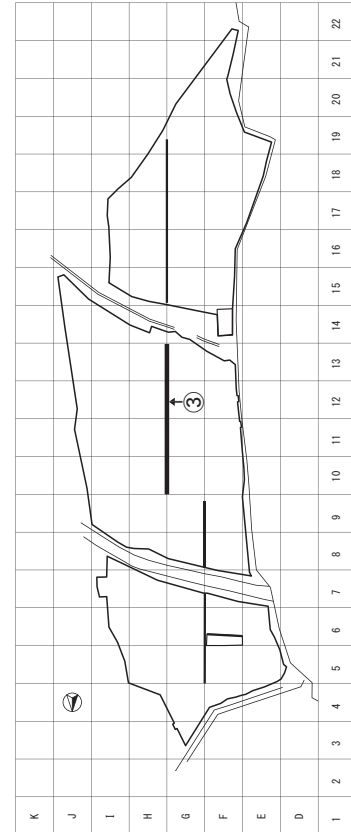
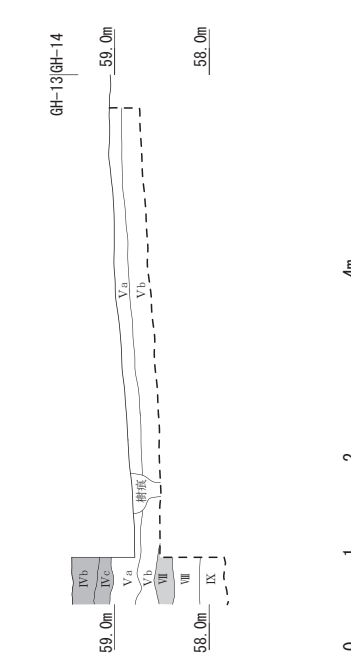
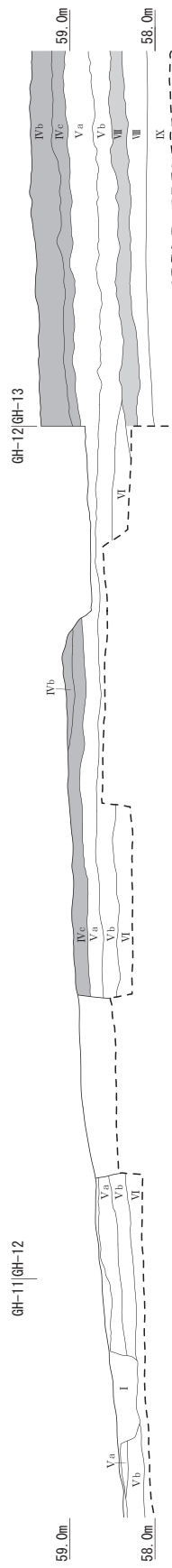
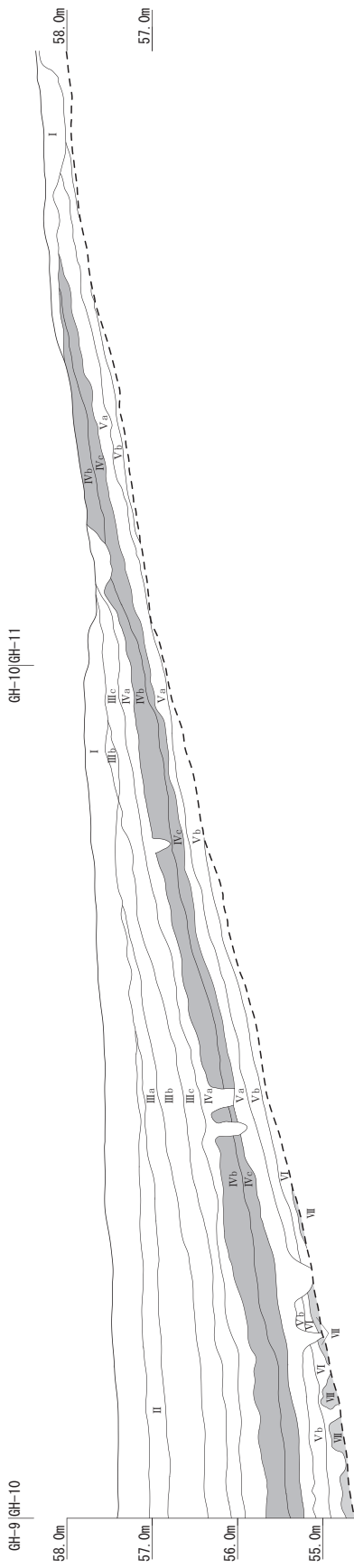


土層③



第7図 土層断面図(1)

土層③

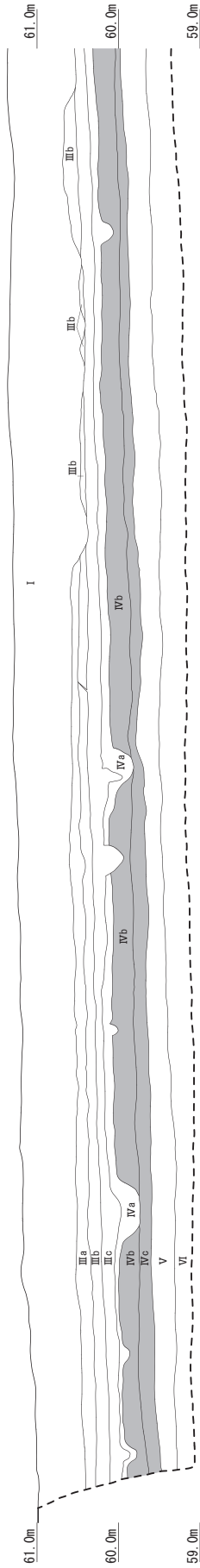


第8図 土層断面図(2)

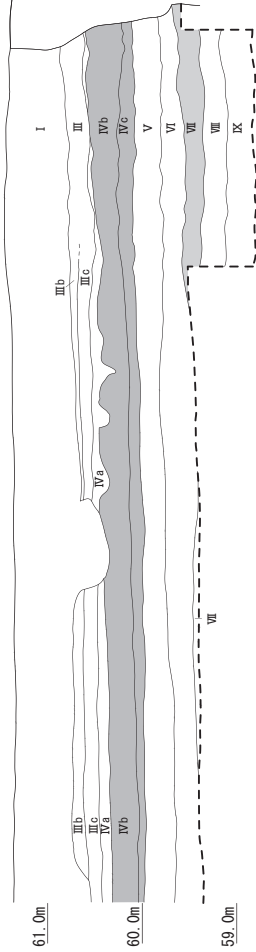
GH-14|GH-15

土層④

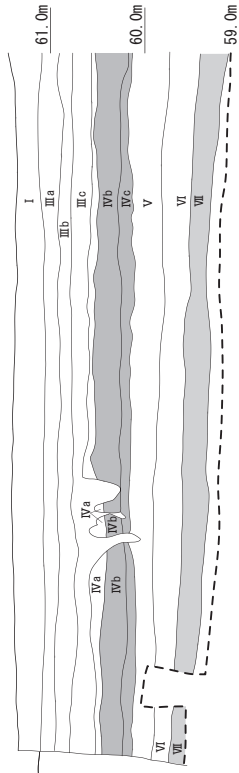
GH-15|GH-16



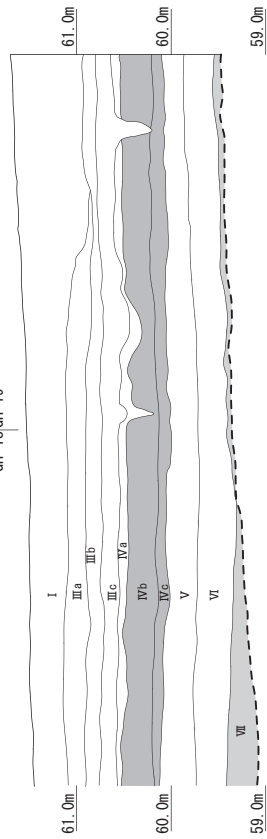
GH-16|GH-17



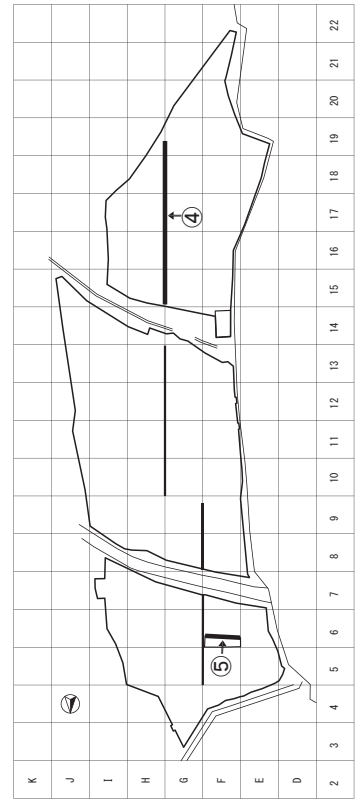
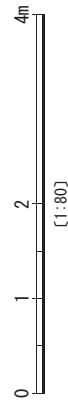
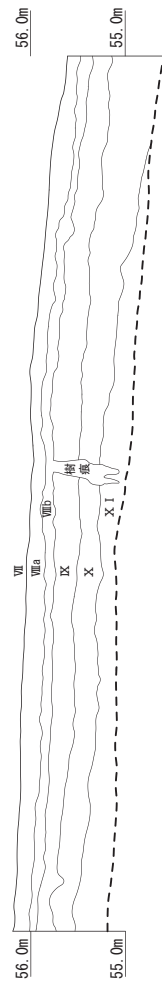
GH-17|GH-18



GH-18|GH-19



土層⑤



土層位置図

第9図 土層断面図(3)

第4章 調査の成果

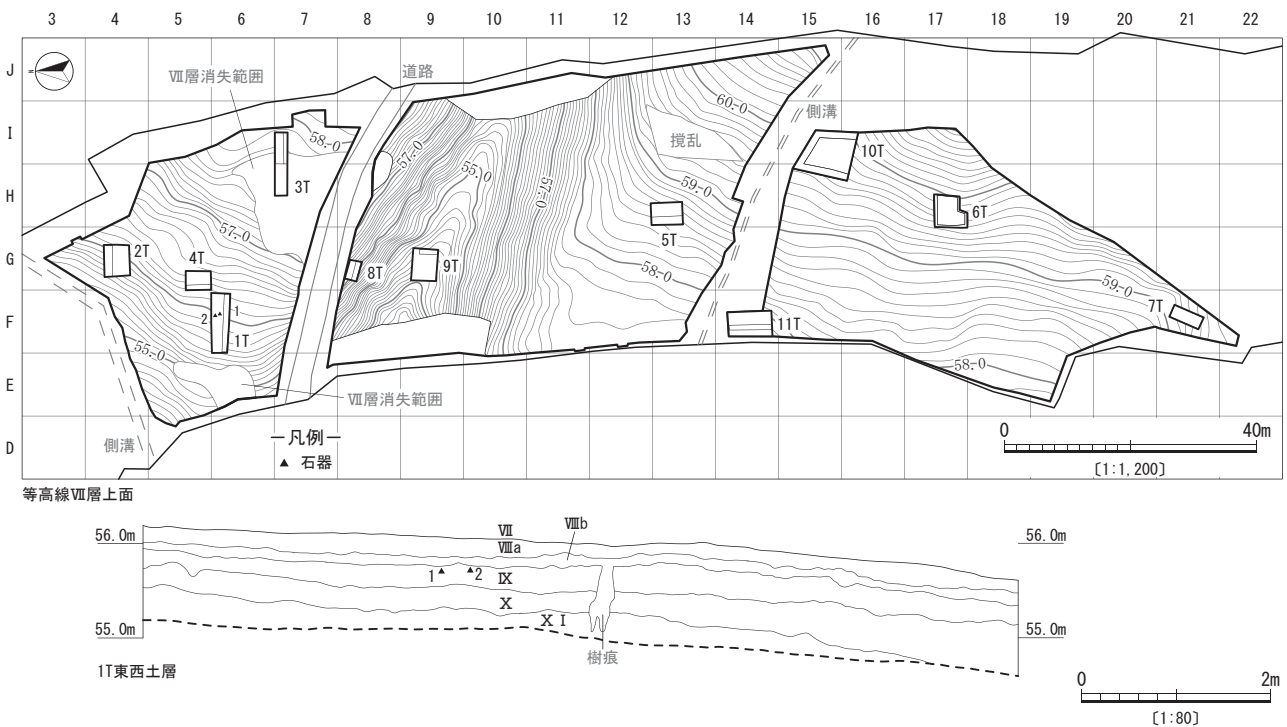
第1節 旧石器時代の調査

1 調査の概要

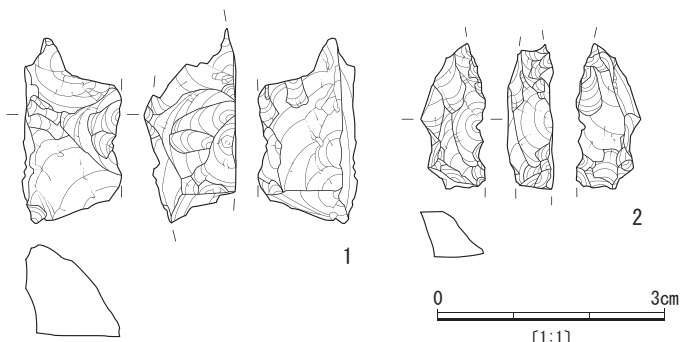
旧石器時代の調査は、各地区に及んで11箇所の試掘坑（1～11 T）をランダムに設け、Ⅷ・Ⅸ層を調査対象として人力掘削を行った。その結果、F-6区の緩斜面の1 Tから、わずか2点の黒曜石小片が検出されたにすぎず、それらはⅨ層中より出土し、約1 mの近距離で5 cmの高低差をもって認められた（第10図）。

2 出土石器（第11図1・2）

1・2は加工痕のある剥片で、定形石器の加工時の破片である可能性をもつ。右側縁に、素材剥片の腹面側からの幾らかのリタッチ痕を留めており、1は破碎して上下と左側面に折れ面、2も左側面の折れ面により形状を失っている。石材は、やや脆く大小の斑晶を含み、三船産とみられる黒曜石である。



第10図 旧石器時代の試掘坑配置と石器分布図



第11図 旧石器時代の石器



写真2 旧石器時代の石器

第3表 旧石器時代石器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
11	1	F6	Ⅸ	122	加工痕のある剥片	(2.42)	(1.30)	1.20	(3.3)	黒曜石	
	2	F6	Ⅸ	121	加工痕のある剥片	(1.90)	(0.86)	(0.60)	(0.8)	黒曜石	

第2節 縄文時代早期の調査

1 調査の概要

調査は、池田降下軽石を含む層からアカホヤ火山灰までのIV層を重機掘削で除去したのち、包含層であるV・VI層を鋤簾・山鉞等を用い人力掘削で掘り下げた。

遺物は、集中して出土した地点はみられず、ほぼ散在した状態であった。大型の破片等はトータルステーションで出土地点の記録を行い、小破片はグリッド毎に一括して取り上げた。遺構は、個々に検出等の記録写真撮影を行い、主軸を設定し実測を行った。

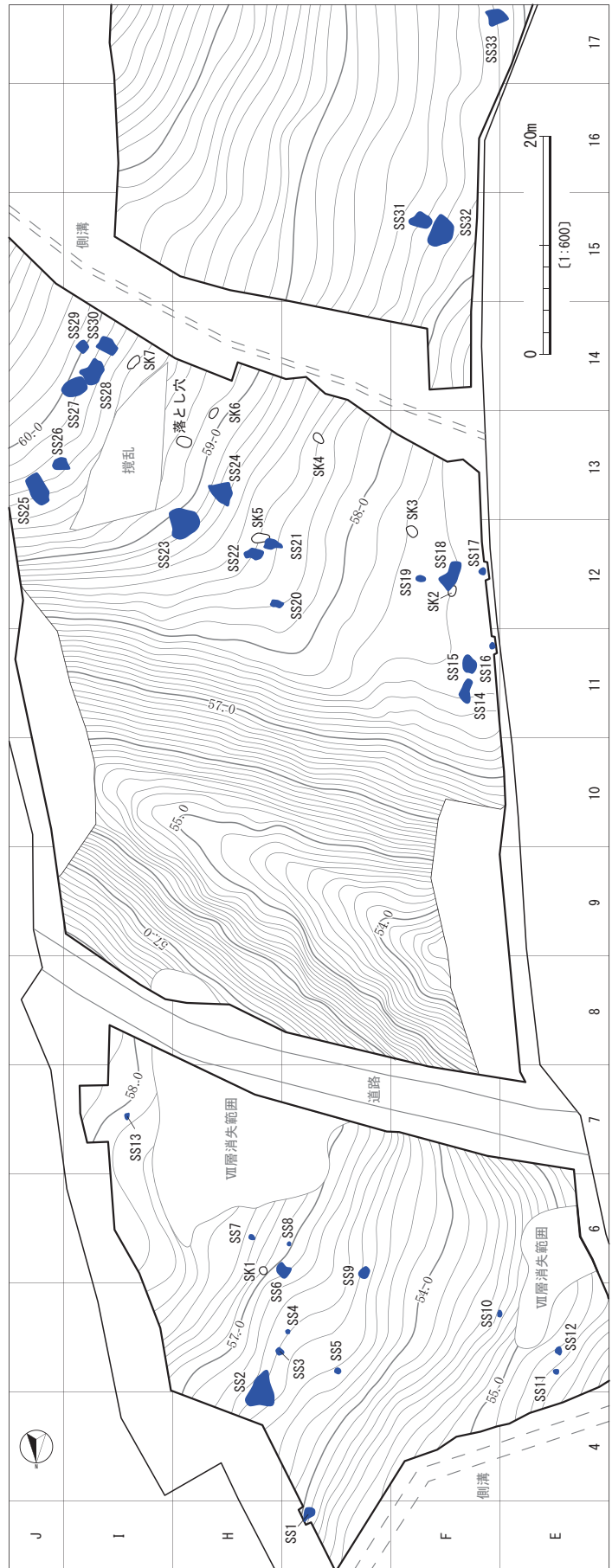
縄文時代早期の遺構として、集石遺構33基と土坑7基、落とし穴1基が検出された。遺構は安楽川へ下る谷部の谷頭部分の南北側に広がる。

礫は散在してみられ、比較的まとまった部分を集石遺構とした。分布は北側の3～7区と、8～10区付近の谷部を挟んだ11～17区に大別され、谷部に近い緩傾斜部分にみられる。石材はほぼ砂岩で、遺跡西側の安楽川河畔でみられることから、ここから持ち込んだものと考えられる。

土坑は薩摩火山灰層(VII層)上面を精査し検出した。12～14区に帯状に広がり、集石遺構の南側に沿うように分布している。

H-13区で土坑として検出された1基は、他の土坑より明らかに深く、床面に逆茂木痕がみられたため、落とし穴とした。列状に並ぶことを想定し、周囲をくまなく調査したが検出されず、1基に留まったが、I-13区付近の攪乱部分に存在した可能性がある。

遺跡内ではE-5・6区やG～I-6～8区などのように、VII層まで破壊されている部分や先述した攪乱を受けている部分があり、遺構が隣接する区域であることから、そこにも集石等の遺構があった可能性が高い。なお、攪乱等を受けた部分は右図を参照されたい。



第12図 縄文時代早期の遺構配置図

2 遺構

(1) 集石遺構 (33 基)

集石 1 号 (第 13 図)

G-3 区の V b 層上面で検出された。礫は約 90 × 150 cm の範囲に広がっており、集中部は約 90 × 60 cm の範囲に楕円状にまとまる。構成礫は 43 個で、1 点のみ凝灰岩で、他は砂岩である。焼けたものが若干認められ、破碎礫が多い。7 割程度が 200g 以下の小型の礫であり、平均の重さは 133g である。礫周辺の土は、炭化物を含む粘性が低い黒褐色の土である。炭化物を 4 点、礫の下部で採取し、AMS 年代測定を行ったところ、2σ 暦年代範囲で 8720calBC-8540calBC (92.2%) の結果が得られた。土器は西側で 1 点出土した。

3 は深鉢の胴部で、縦方向に貝殻刺突文がみられる。

集石 2 号 (第 14 図)

H-4・5 区の V b 層上面で検出された。南北軸より東側に円形の攪乱を受けており、その部分の礫数は不明である。礫は約 260 × 350 cm の範囲に三角形に広がっており、特に礫が集中する部分はみられない。集石 3・4 号に近く、関連する可能性がある。構成礫は 87 個で、2 点のみ凝灰岩で、他は砂岩である。円礫が破碎したものが多く、平均の重さは 32g で、また 100g 以下の礫は 68 個と、かなり小型の礫が多い。礫下に掘り込みはみられなかった。土器が 2 点、北東側で出土した。

4 と 5 は深鉢の胴部であり、貝殻条痕文の上に縦方向に貝殻刺突文がみられ、形状や厚さから同一個体の可能

性がある。

集石 3 号 (第 15 図)

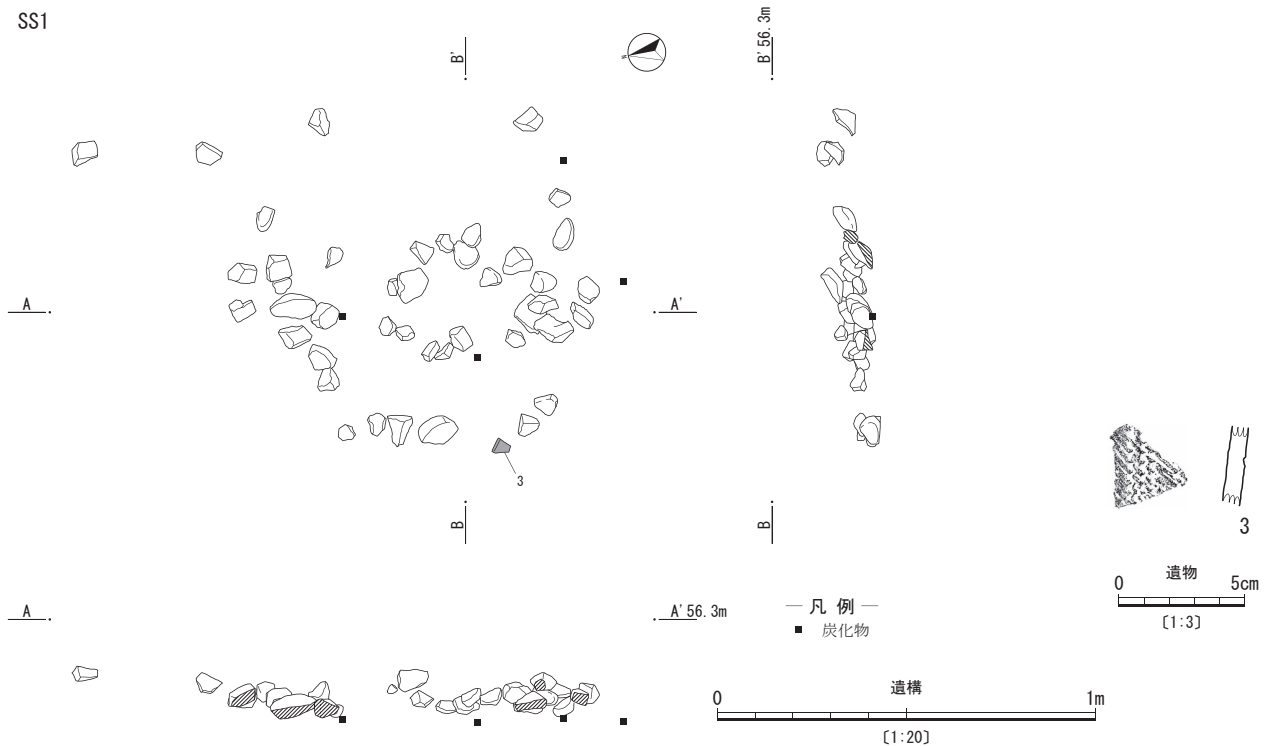
G・H-5 区の V b 層上面で検出された。礫は約 60 × 70 cm の範囲に集中しており、構成礫は 47 個で、2 点のみ凝灰岩で、他は砂岩である。円礫とその破碎礫から構成されている。平均の重さは 209g で、100g 以上の礫は 37 個と、他と比較し大型の礫が多い。礫下にシミ状の黒色土がみられたが、明瞭な掘り込みは確認されなかった。礫の下部から炭化物 5 点を採取し、AMS 年代測定を行ったところ、2σ 暦年代範囲で 8622calBC-8422calBC (87.7%) の結果が得られた。土器は南側に 1 点出土し、周辺の 2 点と接合した。

6 は加栗山式土器の深鉢の胴部である。貝殻条痕の上に斜方向の貝殻刺突文を等間隔に施し、上部の残存部分に楔形突帯の一部がみられ、内面は明瞭なケズリである。

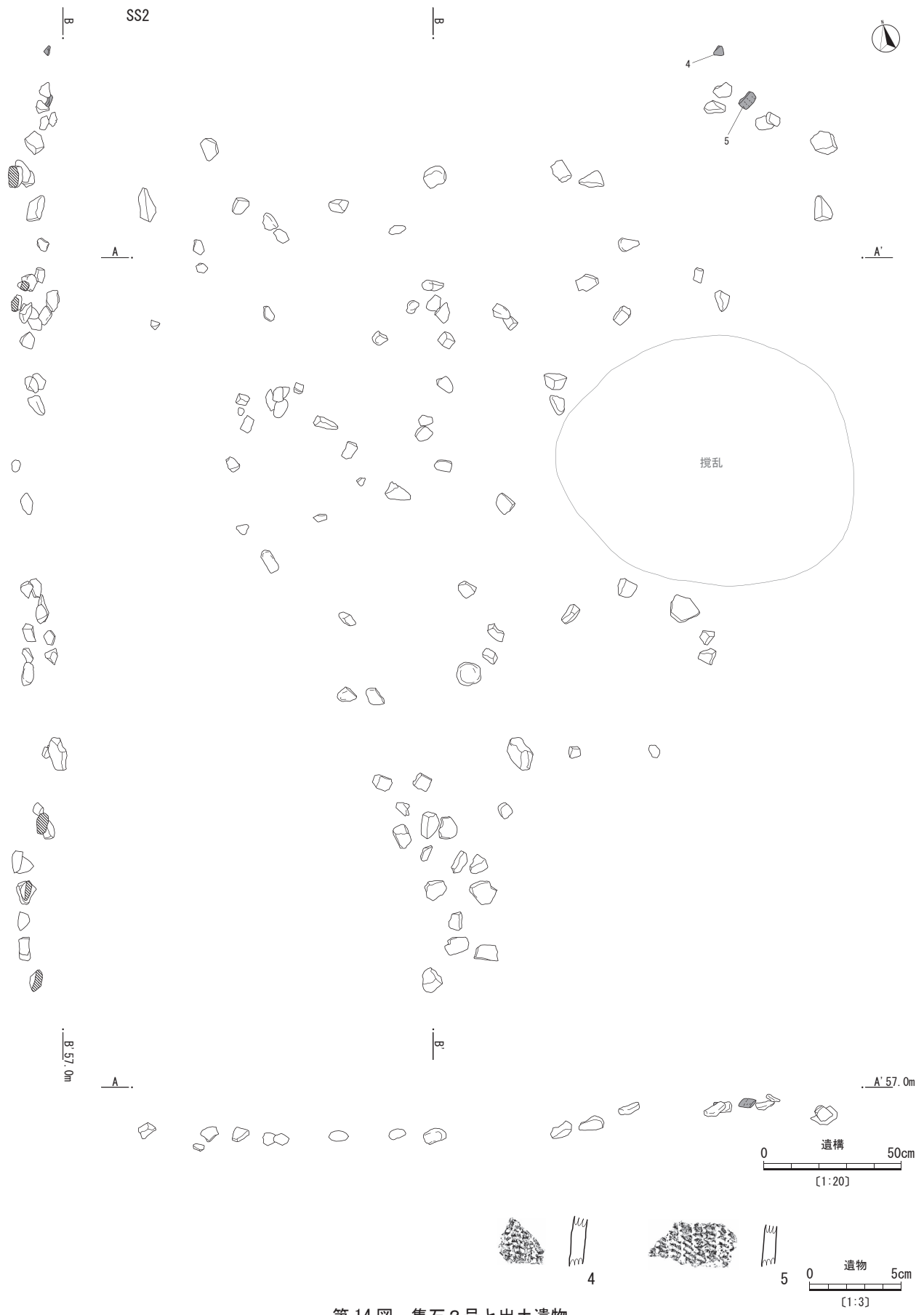
7・8 は 6 と同一個体と思われる深鉢の胴部で、7 は 1 列 2 段の楔形突帯が、8 は底部付近に斜位の刻み目がみられる。

集石 4 号 (第 15 図)

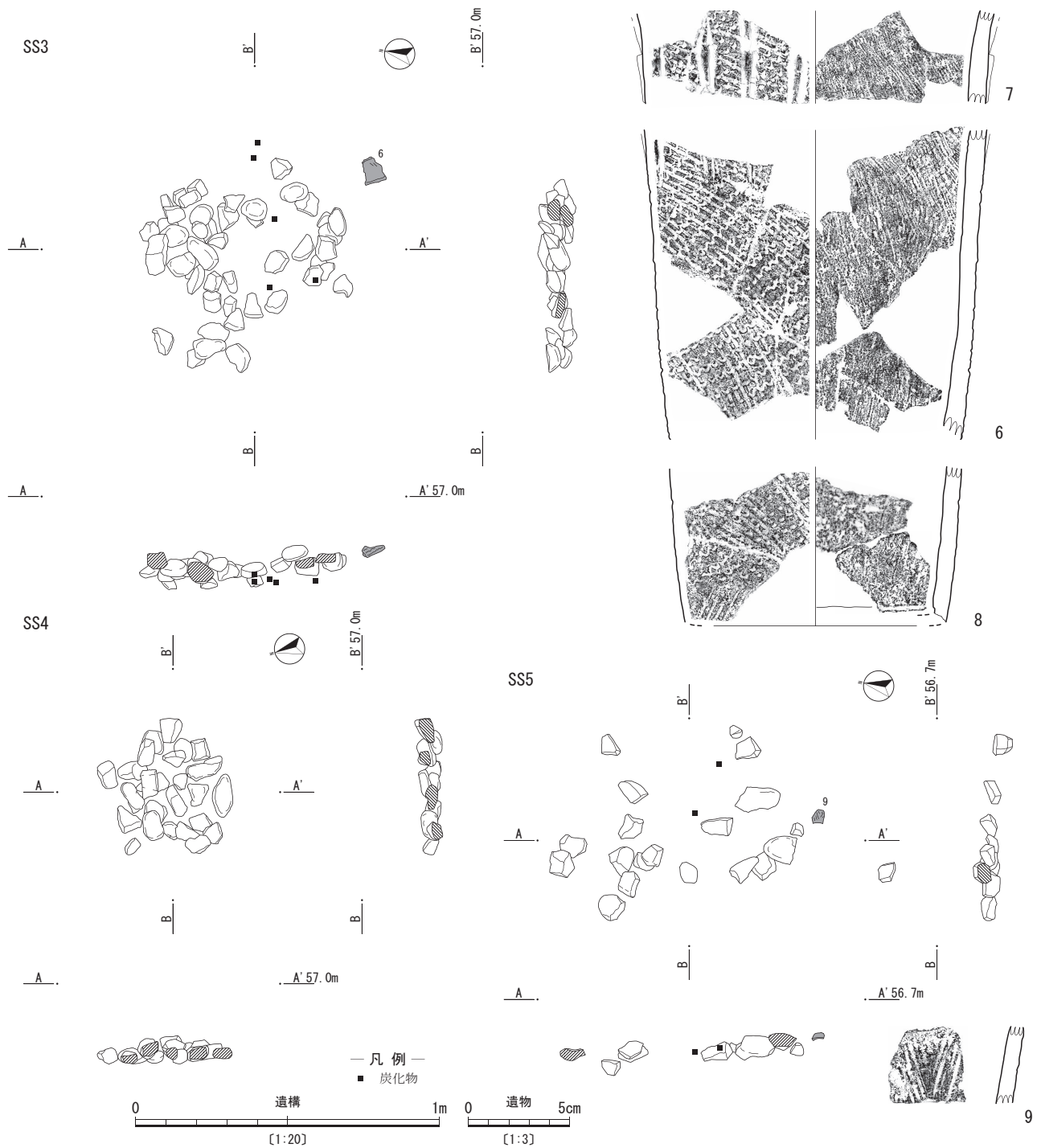
G-5 区の V b 層上面で検出された。礫は約 50 × 50 cm の範囲にまとまる。構成礫は 25 個で、3 点のみ凝灰岩で、他は砂岩である。角が丸い亜角礫がほとんどで、焼けた礫や破碎したものは少ない。平均の重さは 191g であり、やや大型の礫が多い。礫下に掘り込みはみられず、炭化物も出土していない。



第 13 図 集石 1 号と出土遺物



第 14 図 集石 2 号と出土遺物



第15図 集石3号~5号と出土遺物

集石5号 (第15図)

G-5区のVb層上面で検出された。礫は約90×70cmの範囲にややまとまっている。構成礫は20個で、すべて砂岩である。平均の重さは310gであり、大型の磨石状の礫が破碎したものがほとんどである。礫下には掘り込みではないが、炭化物を含んだ染みこみの範囲が認められる。炭化物を2点、礫間から採取し、AMS年代測定を行ったところ、 2σ 暦年代範囲で8924calBC-8737calBC (55.3%) 及び9125calBC-8998calBC (40.1%)

の結果が得られた。土器は南側に1点出土した。

9は深鉢の胴部で、斜方向の貝殻条痕文がみられる。

集石6号 (第16図)

G・H-6区のVI層上面で検出された。礫は約130×120cmの範囲に広がっており、集中部は約70×70cmの範囲でまとまっている。構成礫は61個で、1点のみ凝灰岩で、他は砂岩である。平均の重さは229gであり、拳大の礫が多く、直径10cmを超える礫も確認される。全体的に赤色化した破碎礫が多く、被熱の影響が考えら

れる。礫下に掘り込みはみられず、炭化物も検出されなかった。土器は集中部の外側に2点出土した。

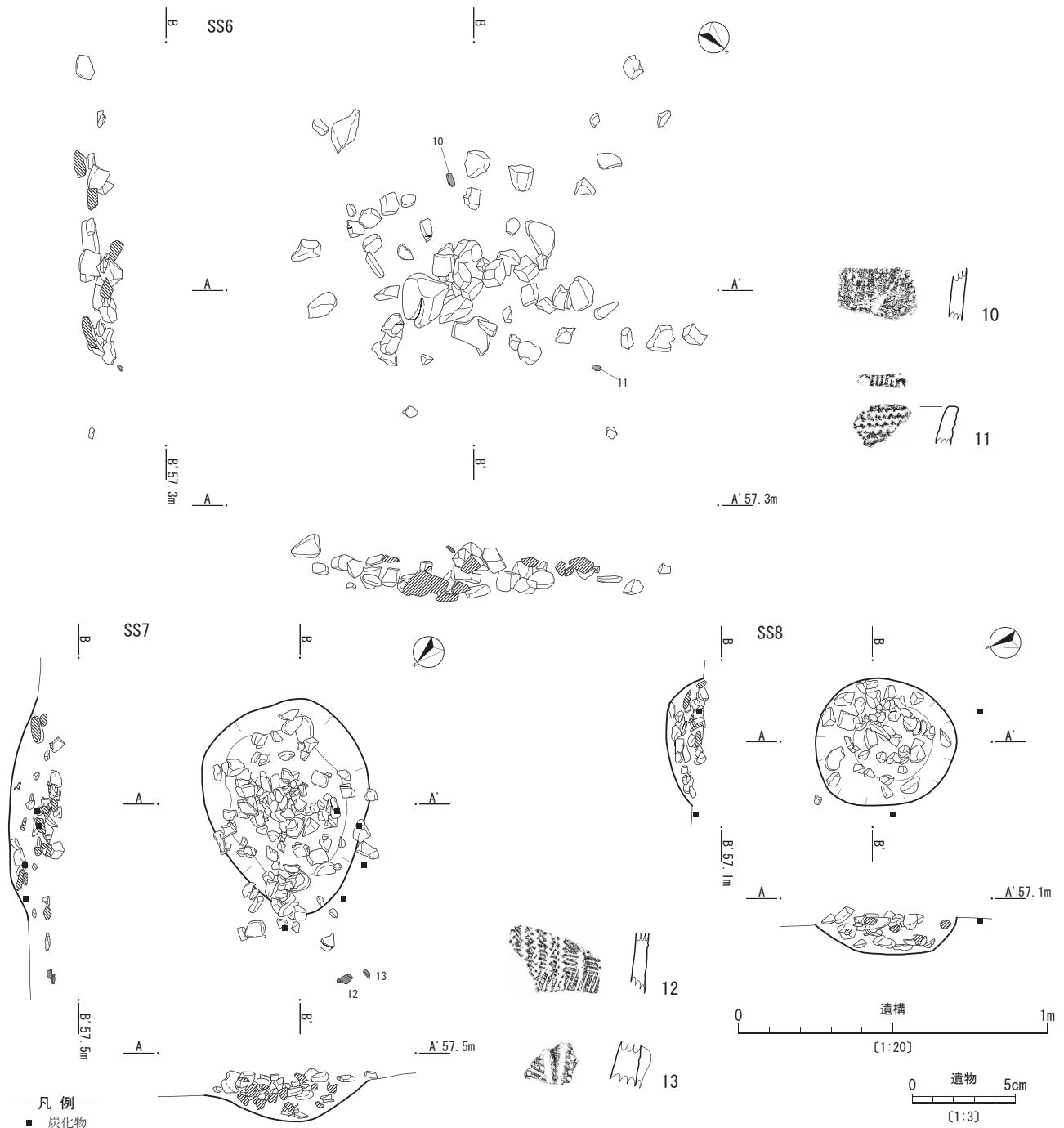
10は深鉢の胴部で、摩耗しているが縦位の貝殻刺突文が薄く残っている。11は深鉢の口縁部で、横位の貝殻刺突文が3条みられ、口唇部は刻み目が入る。

集石7号(第16図)

H-6区のVI層上面で検出された。礫は約90×50cmの範囲に集中している。構成礫は132個で、すべて砂岩である。平均の重さは241gであり、大小様々な大きさがみられる。全体的に被熱を受けたと考えられ、割れ口

がはっきりしたものが多い。礫集中部分の下に70×60cm程度の掘り込みがみられ、埋土は白色粒・褐色粒を多く含む黒色土であり、微細な炭化物が含まれていた。炭化物を5点採取し、AMS年代測定を行ったところ、周辺土器との年代に乖離がみられたため、2回目の測定を行っている。詳しくは第5章を参照されたい。土器は集中部の東側に2点出土した。

12・13は深鉢の胴部である。12は下部に縦位の刻み目がみられることから、底部付近と考えられる。13はシャープさを欠いた楔形突帯の一部が残る。



第16図 集石6号～8号と出土遺物

集石 8 号 (第 16 図)

G-6 区の VI 層上面で検出された。礫は約 60 × 70 cm の範囲に集中している。構成礫は 46 個で、すべて砂岩である。平均の重さは 58g であり、100g 以下の小礫が多く、大型の礫が多い近隣の集石 6 号と対照的である。赤色化した礫も含まれており、破碎礫が多いことから、被熱の影響が考えられる。礫集中部分の下に 50 × 40 cm 程度の掘り込みがみられ、埋土は黄色粒・白色粒を多く含む黒色土であった。炭化物を 2 点、礫周辺から採取し、AMS 年代測定を行ったところ、2σ 暦年代範囲で 8833calBC-8621calBC (95.4%) の結果が得られた。近隣に土器は出土していない。

集石 9 号 (第 17 図)

G-6 区の VI 層上面で検出された。礫は約 110 × 100 cm の範囲に広がっており、約 70 × 60 cm の範囲に方形にまとまる部分がみられる。構成礫は 39 個で、8 点が砂岩で、他はすべて凝灰岩であり、他の集石と比較して石材の違いが大きいの。平均の重さは 95g であり、150g 以下の小礫がほとんどである。赤色化した礫や、掘り込みや炭化物は確認されなかった。土器は集中部の南側に 1 点出土した。

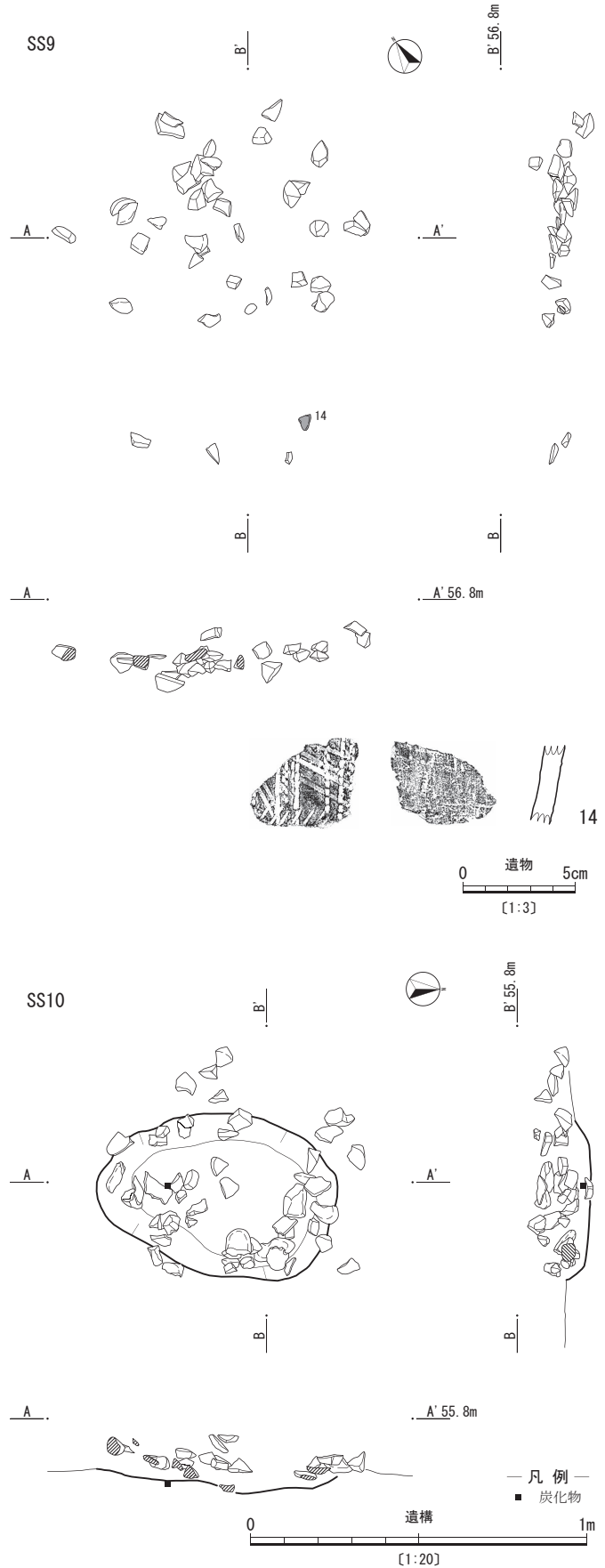
14 は深鉢の胴部で、斜め方向の貝殻条痕文の上に縦位の貝殻刺突文が施されている。下側に斜めの刻みがあることから、底部付近と考えられる。

集石 10 号 (第 17 図)

E・F-5 区の VI 層上面で検出された。礫は約 70 × 70 cm の範囲に方形にまとまっている。構成礫は 49 個で、すべて砂岩である。平均の重さは 116g であり、200g 以下の破碎礫がほとんどである。礫集中部分の下に約 70 × 50 cm の楕円状の掘り込みがみられ、埋土は微細な白色粒・褐色粒を含む黒褐色土である。炭化物を 1 点、掘り込みの床面付近から採取し、AMS 年代測定を行ったところ、2σ 暦年代範囲で 8308calBC-8246calBC (25.1%) の結果が得られた。土器は出土していない。

集石 11 号 (第 18 図)

E-5 区の VI 層上面で検出された。2 段にわたる掘り込みがあり、ほぼその範囲から礫が出土し、特に 2 段目に集中する。1 段目を含めた掘り込みの範囲は約 60 × 60 cm、2 段目は約 45 × 40 cm を測り、形状は円形に近い。埋土は微細な白色粒・黄色粒を含む黒色土で、V b 層土が主体と考えられる。構成礫は 46 個で、すべて砂岩である。平均の重さは 119g であり、200g 以下の赤色化した破碎礫がほとんどである。炭化物や遺物は出土していない。



第 17 図 集石 9 号・10 号と出土遺物

集石 12号 (第 18 図)

E-5 区の VI 層上面で検出された。礫は約 60 × 70 cm の範囲に菱形状にまとまっている。構成礫は 54 個で、すべて砂岩の破砕礫であり、7 割程度が赤色化している。平均の重さは 86g であり、ほぼ 200g 以下の小礫で構成される。掘り込みや炭化物はみられない。土器は集中部の北側に 1 点出土した。

15 は深鉢の胴部で、横方向の貝殻条痕文が施されている。

集石 13号 (第 18 図)

I-7 区の V b 層上面で検出された。礫は約 70 × 40 cm の範囲にあり、南側にやや集中する部分がある。構成礫は 18 個で、2 点が凝灰岩で、他はすべて砂岩である。ほぼ破砕しており、平均で 57g と、小さめの礫が主体である。赤色化しているものも少量みられる。炭化物や遺物は出土していない。

集石 14号 (第 19 図)

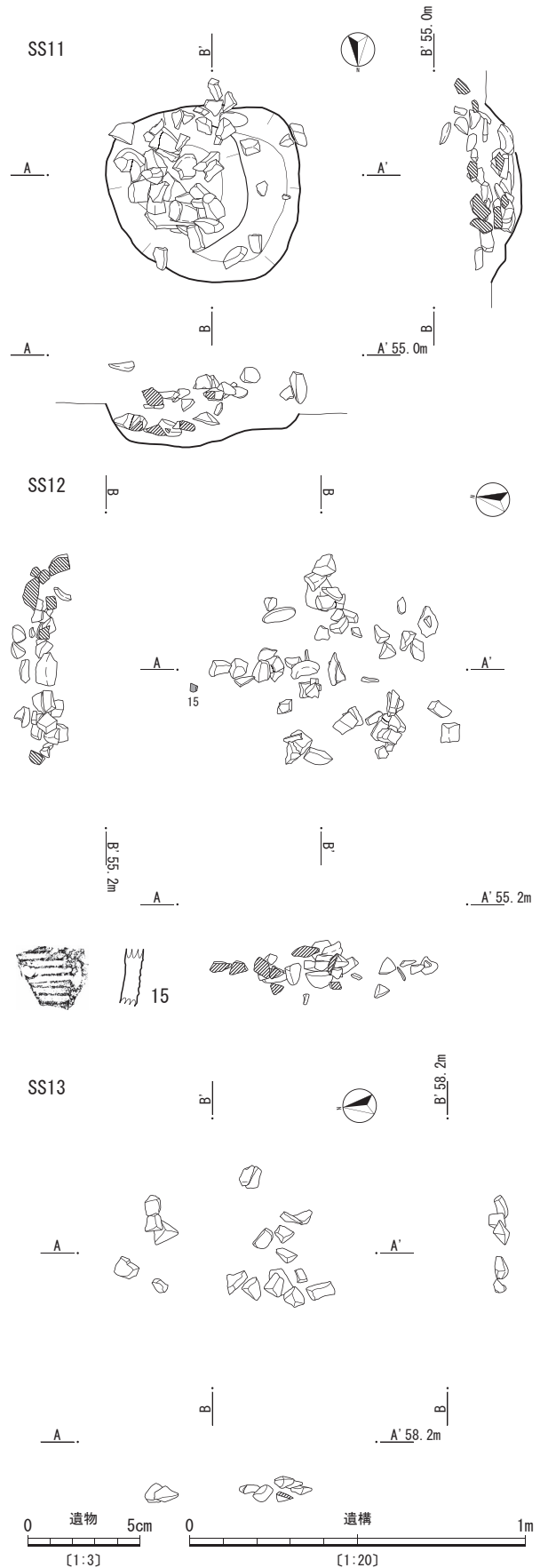
F-11 区の VI 層上面で検出された。礫は約 220 × 120 cm の範囲に南北方向に広がっており、集中部は約 60 × 50 cm の範囲にまとまり、下に円形の掘り込みがみられる。掘り込みの埋土は、微細な白色粒・黄色粒を含む黒色土で、V b 層土が主体である。構成礫は 91 個で、すべて砂岩である。垂角礫や円礫が破砕したものがほとんどであり、平均で 95g と、小さめの礫が主体である。赤色化しているものはみられず、炭化物は出土していない。土器は広がった状態で 6 点出土した。

16 は深鉢の胴部で、斜方向の貝殻条痕が施される。17 は円筒形の深鉢で、口縁部を縦筋の入った山形の工具で押圧し、胴部外面全体及び胴部内面上部に貝殻条痕を施している。外面の条痕は上は横方向で、下側は斜め方向となる。17 については、この集石上部だけでなく、隣接する集石 15 号の礫集中部及びこれら 2 つの集石周辺に広がっていた。土器が接合していることから、集石 14・15 号はほぼ同時期と考えられる。

集石 15号 (第 20 図)

F-11 区の VI 層上面で検出された。礫は約 110 × 100 cm の範囲に南北方向に広がっており、集中部は約 50 × 50 cm 程度の範囲にまとまるが、掘り込みはみられない。構成礫は 41 個で、1 点が頁岩で、他はすべて砂岩である。垂角礫や円礫が破砕したものがほとんどで、平均で 192g と他の集石より大きめの礫が多い。赤色化しているものはみられず、炭化物は出土しなかった。土器は中心から周辺まで広がった状態で 11 点出土しており、17 の一部を含む。

18・19 は深鉢の胴部で、斜方向の貝殻条痕が施される。



第 18 図 集石 11 号～13 号と出土遺物



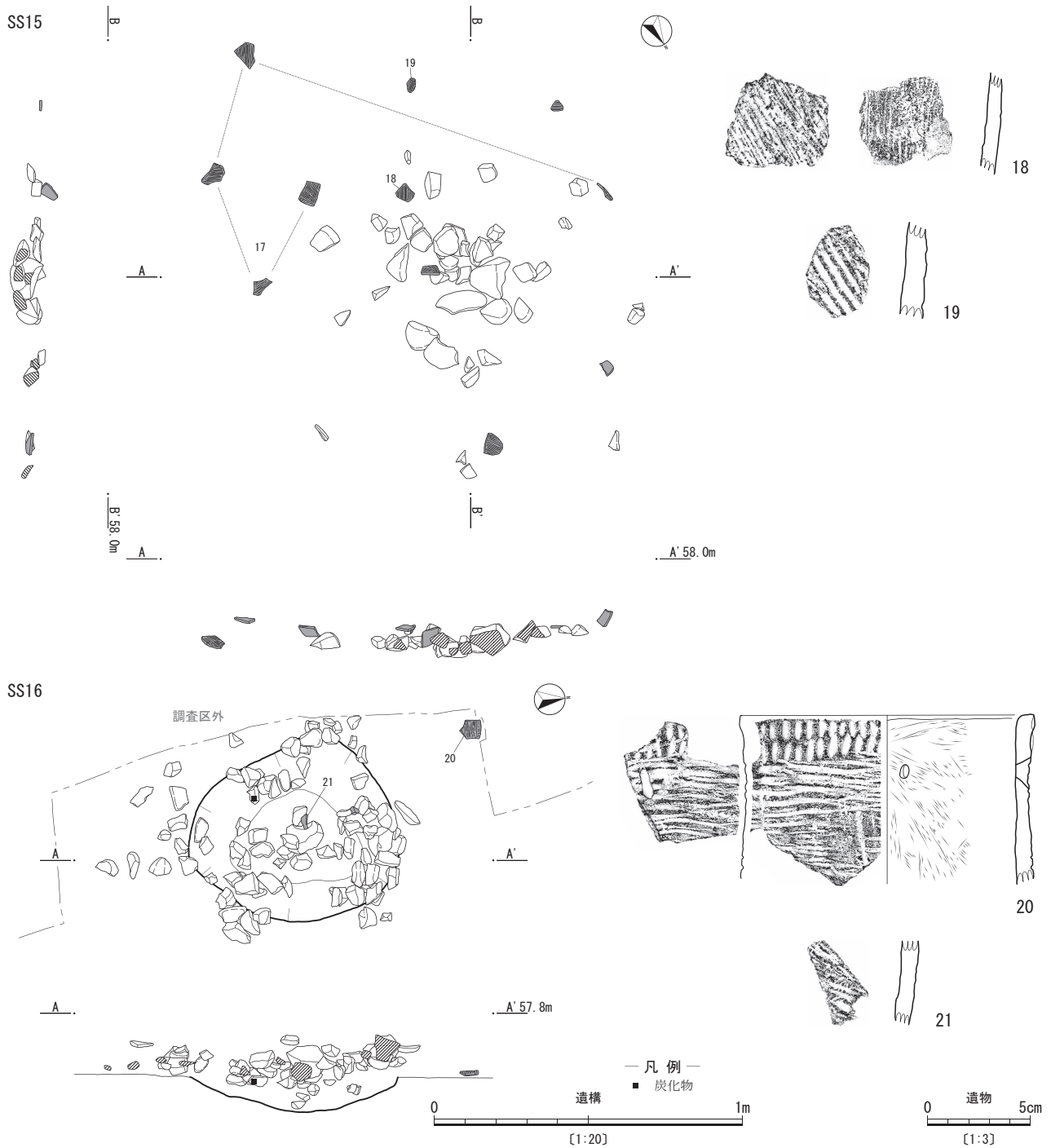
第19図 集石14号と出土遺物

集石 16 号 (第 20 図)

F-11 区の VI 層上面で検出された。調査区西側の壁際にあたり、用地外に広がる可能性が高い。礫は約 100 × 70 cm の範囲にまとまっており、集中部の下に約 70 × 60 cm 程度の円形の掘り込みがみられ、埋土は微細な白色粒・褐色粒を含む黒褐色土である。構成礫は 88 個で、すべて砂岩の破碎礫である。平均で 146g と大小様々な礫で構成されており、一部は被熱し、赤色化した礫も含んでいる。炭化物は礫の下部より 1 点出土して

おり、AMS 年代測定を行ったところ、 2σ 暦年代範囲で 8719calBC-8554calBC (95.4%) の結果が得られた。土器は北側に 1 点、中心部分の上部に 1 点出土している。

20 は前平式土器の深鉢の口縁～胴部で、口縁部外面に 2 列の楕円形の押圧、その下に横方向の貝殻条痕がみられる。また 1 か所に外面 12 mm、内面 6 mm 程度の穿孔が施されており、外側から垂直方向に削ったと考えられる。21 は深鉢の胴部で、斜方向の貝殻条痕がみられる。



第 20 図 集石 15 号・16 号と出土遺物

集石 17号 (第 21 図)

F-12 区の VI 層上面で検出された。集石 16 号と同様、調査区西側の壁際にあり、用地外に広がる可能性が高い。礫は約 50 × 50 cm の範囲に集中しており、その下に約 70 × 70 cm 程度の楕円形の掘り込みがみられ、埋土は 1 mm 程度の白色粒・黄褐色粒や微細な炭化物を多く含む黒色土である。構成礫は 66 個で、6 点が砂岩、他が凝灰岩と他の集石と比較すると石材構成の違いが大きい。平均で 66g と小型で破碎した礫が主体であり、一部は被熱している。炭化物は 7 点散在して出土しており、AMS 年代測定を行ったところ、2σ 暦年代範囲で 8809calBC-8638calBC (95.4%) の結果が得られた。土器は礫の上部付近で 4 点出土している。

22 ~ 24 は深鉢である。22 は胴部で、斜方向の貝殻条痕がみられる。23・24 は底部で、底面に編布痕が施される。

集石 18号 (第 22 図)

F-12 区の V b 層上面で検出された。礫は約 290 × 190 cm の範囲に散在しており、礫が集中する部分はみられないため、集石 17 号などの礫を広げた部分にあたる可能性がある。構成礫は 36 個で、2 点が凝灰岩、1 点が軽石で、他は砂岩である。円礫が破碎したものが多くみられる。平均の重さは 320g で、300g 以上の礫が 12 個と多い。礫下に掘り込みはみられず、炭化物も確認されなかった。土器は散在した状態で 7 点出土している。

25 ~ 27 は前平式土器の深鉢胴部であり、外面に貝殻条痕が施される。28 は下剥峯式土器の深鉢で口縁部が

内弯し、外面には横方向の貝殻刺突文がみられる。

集石 19号 (第 23 図)

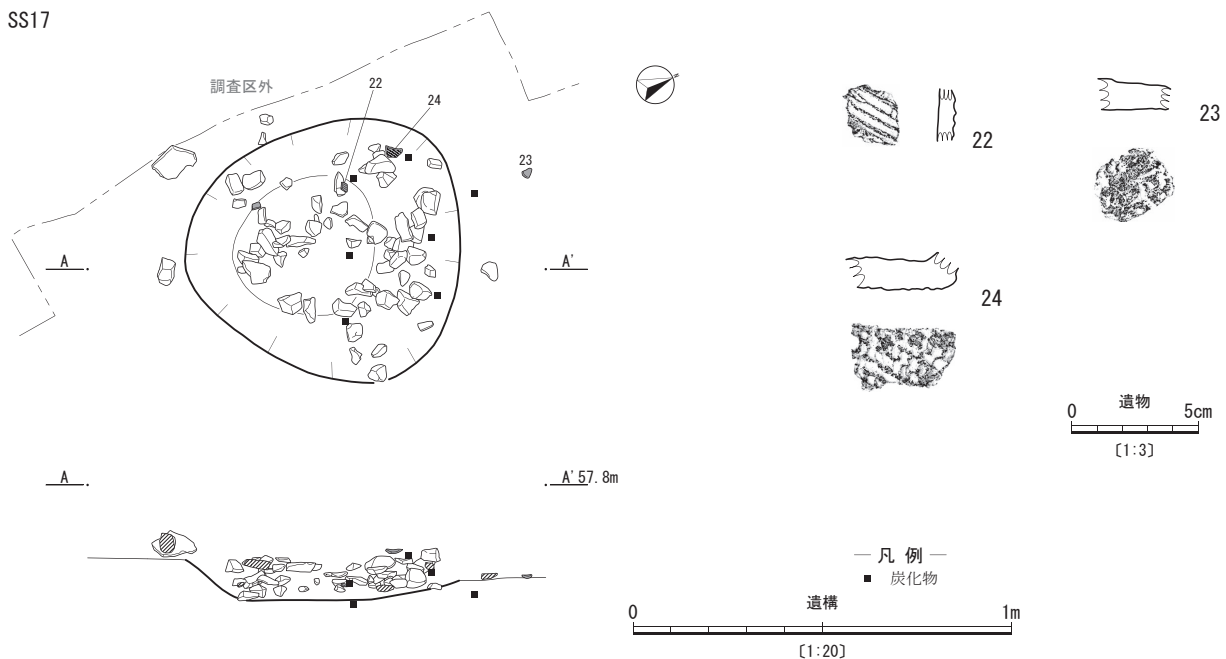
F-12 区の VII 層上面で検出された。礫は約 90 × 70 cm の範囲にまとまっており、ほとんどが破碎礫である。その下に約 120 × 80 cm 程度の楕円状の掘り込みがみられ、埋土は黄色粒や白色粒を多量に含む黒色土であり、V 層土が主体と考えられる。構成礫は 91 個で、凝灰岩が 18 点で、他はすべて砂岩である。平均の重さは 92g であり、100g 以下の破碎礫がほとんどである。炭化物は図化していないが中心付近で 1 点出土しており、AMS 年代測定を行ったところ、2σ 暦年代範囲で 8772calBC-8624calBC (95.4%) の結果が得られた。土器は出土していない。

集石 20号 (第 23 図)

H-12 区の V b 層上面で検出された。礫は約 140 × 150 cm の範囲に広がり、集中部では約 50 × 30 cm 程度のまとまりがある。ほとんどが角礫が破碎したものであり、構成礫は 46 個で、すべて砂岩である。赤色化したものは一部みられる。平均の重さは 78g であり、100g 以下の破碎礫が多い。炭化物や遺物は出土していない。

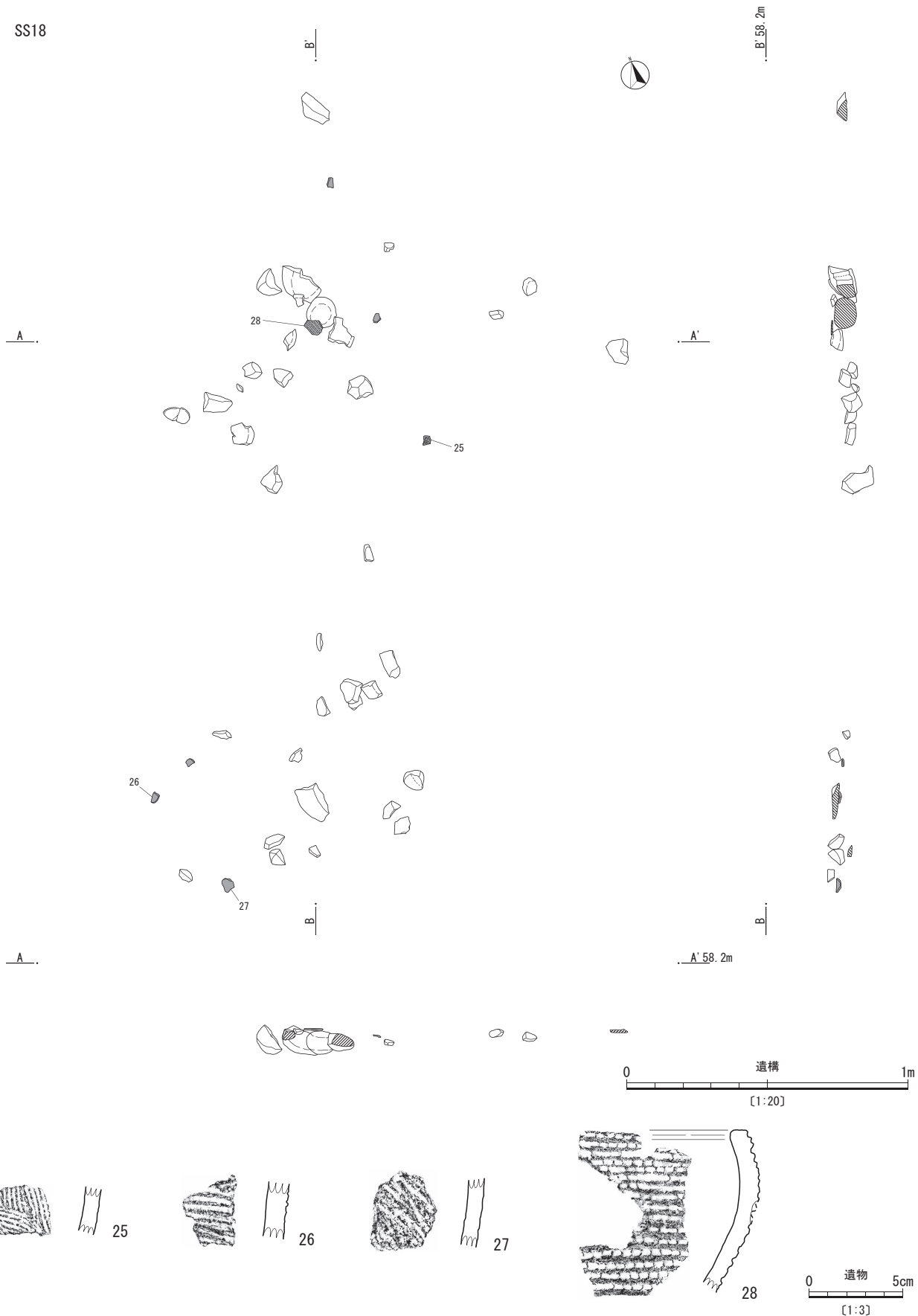
集石 21号 (第 23 図)

H-12 区の V b 層上面で検出された。礫は約 170 × 100 cm の範囲に広がり、集中部はみられない。構成礫は 36 個で、すべて砂岩である。平均の重さは 111g であり、小型の角礫が破碎したものが多く。炭化物や遺物は出土していない。



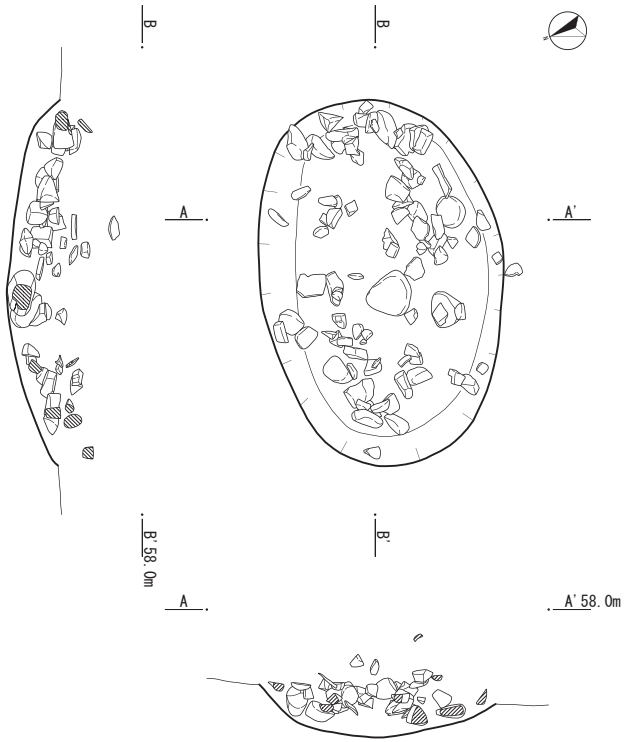
第 21 図 集石 17号と出土遺物

SS18

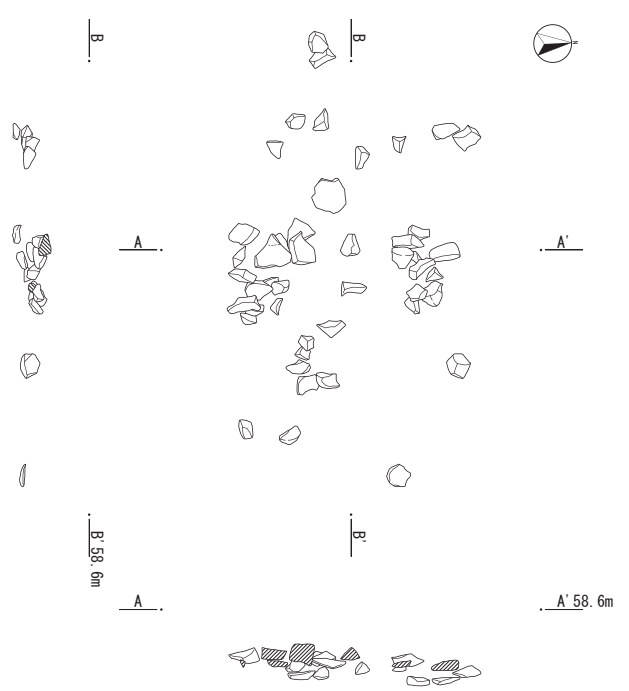


第22図 集石18号と出土遺物

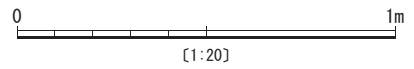
SS19



SS20



SS21



第23図 集石19号~21号